
異世界ファイター

谷口エイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ファイター

【Nコード】

N9761T

【作者名】

谷口エイジ

【あらすじ】

剣道が強い事が突出しているだけで、どこにでもいる一般の高校生が、ある日、気づかぬ間に異世界に！しかしその異世界では、彼は、一般人の上を行くような存在であった。ちなみに、剣道の話ではありません。

PROLOGUE 始まりへのカウント・ダウン（前書き）

はじめに

更新は不定期です。（しかし、一週間以内をメドにがんばります。）

基本的に、感想などをいただくと、助かります。
原動力になったりもします。

一話の文が短いですが、時々すごく長くなります。
作者の力不足によって、区切りを見破れないからです。

PROLOGUE

始まりへのカウント・ダウン

西暦2300年。

地球の方ではの話だが。

なぜそんな言葉がでるかつて？

それは、俺が異世界にいるからだ。

そして、俺は叫ぶ。

「ここはどこだ〜!!」

【異世界ファイター】

時は先程の叫びから、約二日前へとさかのぼる。

その日、土曜日であったが、俺は休日にも関わらず、早起きをした。

ちなみに、今になって悪いが、俺の名前は、田中直人。

生粋の日本男児である。

そんな俺が休日の朝に起きているかということ…、

「ヤバい。剣道の試合に遅れる!」

俺は、剣道部に所属している。

ちなみに今は、高校三年生。

引退がかかったこの年で、華麗につかんだ関東大会への切符。更に、インターハイへの出場にも夢ではないところにいる。

そんなときに遅刻なんてしてはいられないのだ。

「行つてきまゝす。」

親からの独立と言うことも含めて、田舎から東京に単身で出てきたため、家には当然自分しかない。
その家に響きわたったその声は、実に……というより、インターハイを目指す人なのかと問いたくなるほどに、のんきとした声であった。

く都立第三体育館く

走ってくる影、それは、玄関前で止まった。

「はあ、良かった。一番乗りか……。」

直人は、話によれば、一番に会場に到着した。

「いいや、二番だぜ。部長。」

実際には二番目だったのだが……。
そこにいたのは、副部長の稲葉だった。

「稲葉か……、おまえやけに早いな。」

まだ息も絶え絶えな直人は、こちらに向かってくる稲葉の方を見ながらそういう。

「部長が遅いだけっすよ。俺はいつもの時間です。」
「そうか？」

時計を見ると、集合30分前。

「いつもなら、1時間前には来てるはずだぜ?」「まあ、変な夢見て、ちよつとな…。」

変な夢、それは、自分が異世界にいく夢であつたと、後の田中はそう言った。

「まあ、今は試合のことについて考えるか!」

夢のリアルさと生々しさをまた思い出してしまいそうだった直人は、無理矢理頭を切り替えた。

ちなみに、今日は県予選の最終日。

既に関東大会への出場を決めている両者は、実は決勝で当たることになる。

県予選の最終日という事で、個人戦の決勝のみを行う大胆な作り方だが、そこは一時目を瞑ろう。

つまり、田中と稲葉が、対戦するために、1日使うのだ。

更に、県予選で優勝すれば、関東大会なしに、インターハイへの出場が確定する。

両者とも絶対に負けられない。

時間は過ぎて、いよいよ最終日がスタートした。

最初は、前日までに行われた団体戦の表彰。

もちろんこの二人の率いるチームは、優勝こそならないが、準優勝。関東大会への切符をつかんだ。

そして、その後、二人のためだけの試合が始まる。

勝てばインターハイ、負けても関東大会。

試合時間は五分。

暑い中行われる為、神経を消費する。

「はじめ!!」

試合が始まった。

両者とも一步も譲らない。

片方の鋭い面も、相手がきれいに対処する、といった形で、一本もとれない。

試合も中盤にさしかかった頃に、赤の田中の面!

しかし、これは稲葉がすんでのところで止めた。

だが、結局試合はドロ―。

しかし、先ほどの面が響いたのか、判定は、三対〇で、赤の田中が見事に優勝を果たした。

その帰り道、田中は異様な光景を目撃した。

帰っている目の前には、少し残念がった稲葉ともとれる人物が歩いているのが見えた。

田中は、それを見て走り出したのだが、稲葉が曲がり角を曲がり、自分も曲がってみると、そこに稲葉の姿がなかった。

稲葉は、その曲がり角から急に走り出したとは考えられないし、ましてや走ったとしても、撒けるほど近くに複雑な路地もなかった。ましてや、近所の曲がり角というわけでもなし。

田中は、変な感じにとらわれてしまった。

>翌日<

結局、県大会後のミーティングに、稲葉は出てこなかった。

稲葉は、自分がどんなにひどい負け方をしようとも、完璧な勝ち方をしようとも、後日のミーティング会には、必ず参加するような男

だった。

それだけに、今回の欠席には、かなり驚きを隠せない。他の部員たちにも、その話題があがり始めた頃、急にミーティング室のドアがノックされた。

そこには、顧問と稲葉の両親が立っていた。

そして、その両親がいきなり、

「ウチの子を知りませんか？」

泣き叫ぶような声。

両親の顔を見ただけでわかった。

稲葉が、行方不明になったこと。

そして、あれが稲葉であったという事。

No.1 いざ、異世界へ

稲葉の両親の、いきなりの宣告。

全員が凍り付く中、その例外は田中だけ、すべてを知っている田中だけ。

『結局アレは稲葉だったのか…。』

今さら、田中は頭の中で後悔する。

「それにより、今からみんなで稲葉の搜索をしようと思う。希望者だけでかまわない。」

顧問の一声。

その声に賛同したのは、やはり部員全員であった。

丁度、現場検証をしようと思っていた田中でもある。

『しかし、副部長だけあって、人望あるんだなあ。』

改めて、人を束ねることの偉大さを知った田中は、声に出さずに感嘆した。

「ありがとうございます！」

稲葉の両親は、賛同した全員に向かって、深く頭を下げた。

> 荒川流域 <

田中は昨日、あの光景を目撃した荒川流域に来た。

その河川敷から、一本住宅地に入ったところで、稲葉は消息を絶ったのだ。

「ここで…合ってるんだよね…？」

再び現場に来てみたが、やはり変わったところはない。

最早、昨日の出来事が逆に、夢だったのではないかと思えるくらいだ。

田中は、辺りを見回してみる、やはり変わったところがない、思ったが…、

「あれ？これは…。」

田中は地面にかがんだ。

目の前にあるのは、二つに連なったマンホール。その他は、一面にアスファルトが並んでいる。

「ちょっと、模様が違っただよな…。」

よく見れば、模様が違っている。

大体、マンホールと言うのは、市区町村によって、印字されている文字やその位置が違う。

しかし、逆を取れば、同じ市区町村内であれば、同じ模様のはずだ。時々違うものもあるが、用途が違うマンホールだったりする。

「開けてみるか…。」

そこには、大きいのと小さいマンホールと。

田中は、他の周りにあるマンホールと比べながら、まずは同じ模様のマンホールを開ける。

『ガチャ…、ジャー。』

案の定、マンホールの中には、水が走っていた。

田中は、そのマンホールを閉める。

そして、残ったのはもう片方のマンホール。

もう片方のマンホールに手をかけ、上げると、それほど『マンホールの蓋』と言ったような重みは感じず、いとも簡単に開いた。

『ガチャ…、……。』

中を確認する前に、水の音を聞いたが、水の音はしない。

田中は、思い切って中を覗いてみる。

「……！？」

中には、浅い穴の上に、ちょこんと便箋が封筒の中に入っていた。

早速、中を開けてみる。

その時、田中はなぜか、恐怖心というものを感じなかった。

開けてみると、そこには、一枚の紙が三つ折りに。

別に変った様子もなく、普通の感じである。

早速、中身を読んでみる。

しかし、そこには、文字…というよりも、記号みたいなものが連なっている。

「なんだこれ？なんかの暗号か？」

しかしその時、いきなり、便箋が光り出した！！

「うわっ！なんだ？！」

田中は、あまりの光のまぶしさに目を背けてしまった。
言うなれば、いきなり目の前に太陽光が反射してきたくらいの光だ。
数秒後、光が消えたのを確認して、再び便箋を見てみると、

「あれ？文字が…ない。」

田中は、光のせいで目がおかしくなったのではないかと思い、目をこすって見るも結果は同じ。

「どうなっているんだ？」

これには、田中もお手上げ状態であった。
その時後ろから、

「先輩、なんかありましたか？」

一緒にこの近くを探している後輩が、田中の様子を見に来た。

「あ…いや…その…。」

いくら、重要なものを見つけたにしろ、何も書かれていない便箋を渡すわけにはいかず。

「何も、なかった…よ。」

一応、こう伝えておいた。

「先輩もですか。」

後輩は、田中の怪しい感じには一切気付かずに、再び手掛かりを探しに出かけた。

「はあ、一応、持っておこうかな。」

田中は、その便箋をポケットに入れ、新たな手がかりを探し始めた。しかし、ポケットに入れたとき、再び便箋が小さく光ったのには、気付かなかった。

>夕方<

稲葉を捜していた部員は、再び、部室に戻ってきた。

顔色を見れば、どうやら手がかりは見つけられなかったらしい。

「手掛かり…なしか。」

同じ年の部員がそう呟いた。

それにより、また全員の顔色が悪くなる。

結局、このまま部活動は解散。

部長である田中は、先生に『手がかりなし』と伝えた。

>自宅<

そのままどこにも寄らずに、家に帰ってきた。

両親に気付かれないように、平静を保ってはいたが、自分でも悪足掻きだとは思っている。

「どつしたの？何かあったの？」

案の定、母親に気付かれたが、

「何でもない。」

そう言って、自分の部屋に入ってしまった。

>自室<

「何だっただんだろうな…。」

何かしら今回の事件と関係がありそうな便箋を手に持ちながら、ベッドに横たわる。

一時間くらい便箋を眺めていただろうか。
すでに時刻は、10時を過ぎている。

「明日も早いし、寝るか。」

そう言って、シャワーを浴びた後、眠りについた。

…

二時間ぐらいたったであろうか。

田中は、異常なまでの暑さと、眩しさに眠りがさめてしまった。

『もう朝か?』

田中は、寝相があまり良くないために、起きてしまったとしても、すぐに目を開けることは出来ない。

さらに眩しさも相まっているために、尚更である。

背中の中もごつごつしていて、とてもベッドの上とは思えない。
いや、最早床でもなかった。

ようやく、目も慣れてきた頃、ゆっくり目を開けた。
開けると、大きな青空のど真ん中に太陽。
吃驚して起きあがると、そこには、一面の地面が…。
田中は、思わず叫んでしまった。

「ここはどこだろ。」

No.1 いざ、異世界へ（後書き）

次話から、ようやく本編に入ります。

No.2 異世界に到着！

「ここはどこだ。」

田中は、ただ、叫ぶしかできなかった。

ちなみに、現在田中は、地面のど真ん中。

周りには、見渡す限りの地面。

建物の影など、一切なかった。

言うなれば、サハラが砂から地面になって、広がっているような状況だ。

しかし、このまま座ったままでも仕方がない。

あいにく、一面が地面だというのに、それほど暑くない。

まだ、夏場に剣道着を着ている方が暑い。

そんなわけで、田中は取り敢えず、今よりも状況が良いところを探し始めた。

(30分後)

「くそ、俺はどこにいるんだ？ちゃんと進んでいるのか？」

進んでも進んでも同じ景色が続く。

こうなつては、そういう錯覚が出てきてしまうのも無理はない。

しかし、さっき落ちていた小枝を差して作った目印を今のところ見つけてはいないので、どこかのベタな『同じところを何周もしている』現象ではないらしい。

その現象ではないとわかって以上、歩みをやめることは出来ないのだ。

「でも、こんな地面があるんだから、絶対このあたりに何か集落みたいなものがあるはずだよな？」

（更に30分後）

「よし、元気全快！」

田中は、この中で水の湧き出ているポイント『オアシス』を発見していた。

更に、このオアシスを少し進むと、地面一点張りだったものが、だんだんと草や木が生えていたりするものに変化していた。

「さあ、頑張るか。」

オアシスで水を飲んで、元気に歩き出そうとしたとき、ふと自分の今の所有物が気になった。

「着ている服と…、腕時計と…、って腕時計??」

寝ているときに時計をしている癖があったのか、腕時計も一緒に来ていた。

更に、生憎『世界時計機能』がある時計だった。

これを使って、太陽の位置からだいたいの時間を割り出したら、自分が居る場所が大体解るという魂胆だ。

しかし、そう思って時計をよく見みると…、

「あれ…？点いていない。」

腕時計は、全くとして光らなかった。

時計自体には目立った損傷はなく、更に『ソーラー発電式』であるため、この日差しでは電池が切れることはまずないだろう。つまり、上記のような原因でないとするならば、

「やっぱり、ここは異世界なのか？」

そういう結論に達してしまう。

つまり、この条件の中で、時計が動かないとするならば、『内側に重大な損傷がある』または、『この世界では原理がないために、物理に反する』ぐらいしか結論では出てこない。

更にいえば、外傷が見あたらないのに、内側に損傷があるとは考えにくい。

とにかく、頼みの綱を失った田中は、少しの間、オアシスの真ん中で俯いていた。

だが、そうしてばかりもいられない。

まずは、一刻も早くこの状況から脱出することが、大事である。

そう考えた田中は、立ち上がって、土だけの地面から、草が生えている地へ向けて歩き出した。

（30分後）

「すげ〜…。」

田中は、つい先ほどまでの光景との変貌ぶりに、感嘆してしまった。

「でけえな〜…」

まだ、あいた口がふさがらないようだが、そこには、大きな一つの

未来都市があった。

超高層ビルが立ち並び、電気自動車が走りまわり、さらに空にはリニアモーターカーが走っていた。

勿論、地球でもないことはないのだが、ここまで技術が確立されていない。

さらに、地球での西暦2300年現在、ここまで壮大な未来都市はまだ建設されていない。

つまり、異世界だからこそ出来るものなのだと、田中はつくづく思った。

この時点で、田中はここが異世界であることを認識しているようだ。

田中が、この未来都市を見ながら、感傷に浸っていると、

「おーい、お前さん、そこで何やってんだ？」

後ろから、声が聞こえた。

ここで、なぜ田中が異世界の言葉がわかるのか、などという突っ込みは勘弁願いたい。

田中がふり返つてみると、そこには、大きな馬車に乗った人がこっちに向って、手を振っていた。

田中は、早速その人の近くに寄って行ってみる。

「お前さん、あんなところで何やってたんだ？」

「ええーっと……」

馬車に乗った人のいきなりの質問。

それに、田中は少しもってしまった。

「まあいい。とにかく乗って行きな。」

馬車に乗った人は、とても親切な人だった。

「俺は、サフランて言う。まあ、仕事はこの当たりの見回りかな？」

サフランという男は、この当たりの見回りをし終わって、町に戻る途中だったようだ。

「しかし、変なこともあったもんだよね。」

サフランは、俺の顔を凝視しながら、感慨深げな声を出した。

「一昨日は、お隣に人が降ってきたみたいだし……。」

サフランは、聞き捨てならない事を聞いた。

「それはどういうことだ？」

田中は、その話に食いつく。

もしかして、稲葉のことかもしれない。

更にいえば、稲葉に再会できるかもしれない。

「まあ、落ち着け。家でゆっくり話す。そっぴゃ、お前の名は何というんだ？」

話せば長くなるらしい。

サフランが、悪い人ではないと判断した田中は、自分の名前を名乗った。

「田中という。」

「そういえば、さっきの降ってきた奴の名前もそんな感じだったよ
うな。」

更に、サフランは意味深な言葉を発した。

No.3 サランダ連邦

田中は、町の中に入った。

サフランが、うまく紹介してくれたおかげで、警備の人には、あまり怪しまれずに済んだ。

町には、外で見た風景以上のものであった。

町には、有機ELを使った電光掲示板。

六 木ヒルズなんて比べ物にならないくらいに高いビル群。

大きな街頭ビジョンでは、かなり遠くからみないと、自分の目に画面全体が入らないくらいである。

そうやって、田中が町の風景に見とれていると、サフランがこう言ってきた。

「ところでお前さん、これからどうするんだ？」

そういえば、ノーマークだった。

ここ2時間、いきなりのが多すぎて、自分の身なりを棚に上げて、町を探していた。

そのためか、サフランに指摘される今の今まで、今後については考えていなかったのである。

「……。」

田中は、完全に固まってしまった。

「ならば、家の所に泊まればいい。今なら、一つ部屋が空いているからな。」

サフランが、固まった田中を見て、そういった。

聞くところによれば、サフランは下宿の経営もしているらしい。かなり下宿所の割に設備が良く、学生には人気らしいが、運良く一部屋あいていたという。

やはり、サフランはいい人のようだ。

「じゃあ、お願いします。」

田中は、少しそこで生活させてもらうことになった。

（下宿所 三丁目）

そこには、町の第一印象とは、かけ離れた、如何にも『下町』という感じの建物が建っていた。

ちなみに、隣には、未来都市丸出しの大きなビルが建っているが、そこは未来都市。

そこら辺の配慮も抜群で、下宿所には日が遮られることはなかった。

「さあ、入れ。」

まず田中は、サフランの部屋に通された。

そして、サフランは部屋から出ていく。

どうやら、田中がこれから寝泊まりする部屋の、準備をしに行くようだ。

田中は、部屋を見回した。

不思議なことに、文字が読めないといったこともなかった。

本当に異世界なのかと疑ってしまいそうだ。

そうして、部屋をある程度見回していると、用事が済んだサフランが戻ってきた。

ドカリと座ると、唐突に話し始めた。

「つい先日のことだ。お隣の国に『異世界から来た』とか言う奴が落ちてきたらしい。」

十中八九稲葉のことであろう。

田中は、更にその話に耳を傾ける。

「そいつの話によるとな、『チキユウ』とか何とか言うところの『二ホン』で国から来たらしい。」

完全に自分と同じ条件である。

この時点で、稲葉だと言うことが確定した。

「そこに俺も連れてってください。」

田中は、叫んだ。

それに対して、ミランダは、

「おいおい、まさかお前さん、その話信じるのかい？ 巷では、『頭がおかしくなったんじゃないか？』といって、誰も信じちゃいないぜ？」

田中は、自分のこれまでの経緯を、包み隠さずサフランに話した。その間、サフランは黙って聞いていた。

「ほお、こりゃ参った。まさか、もう一人同じ奴がいたとはな…。」

サフランは、別に田中を疑わなかった。

それどころか、感心していたようだ。

「なら、この国のことも知らないってわけだ。」

サフランは、いきなりそう言つと、今自分たちがいるこの国について話した。

「この国は、『サランダ連邦』って言うんだ。ほとんどの奴は、『西側』と呼んでいる。」

「西側：とは？」

サフランは、この国と、この世界について説明し始めた。

「この星は、中心に大きな大陸が一つある。それが、西と東にちょうど半分になるように川が流れてんだ。そこが、国の境界線。」

どうやら、統計上、本当にちょうど半分になったらしい。

ちなみに、その川は、どちら側の領土でもないようだ。

「サランダ連邦は、その西側に位置するから、西側。ちなみに、東側はハロルド帝国。」

となると、稲葉はハロルド帝国側に落ちたことになる。

「じゃあ、そのハロルドって所に連れて行ってください！」

「それは、少し無理な話なんだ。」

無理というのはどういふことなのだろうか。

「今、西側と東側は、こう着状態なんだ。」

「え？」

サフランの話によれば、現在両国は、戦争間近。原因は、この町にあるらしいのだが。

「東側は、この町を作ることによって、環境が乱れるといっているらしい。」

確かに、現在の地球と同じことが言える。

では、ハロルド帝国でも同じことが言えないか？

「東側は、それを懸念して、昔ながらの町を保っている。『田舎思想』とか言ってたな。」

「じゃあ、戦争間近だから、東側には入れないのか。」

「一般人は入れない。入れるのは、貨物船くらいかな？」

なら、稲葉にもあつて話が出来ないのか。

「まあ、こう着状態が解除するのを待つしかないわな。」

サフランは、悩む田中を見ながら、そう言葉を発した。

（5分後）

あれから、二人とも全く言葉を発しなかった。

その時、焦れたサフランが大きな声で一言。

「ああ、焦れたい。こう言うときは、町へ出て、ぱあーっと、盛り上がらないと。」

その重たい空気を、一新するような感じ。

「そう、だよな。今悩まなくなつて、時間はあるもんな……。」

田中も、その意見に賛同した。

そして、二人は勢いよく、町へと繰り出した。

No.4 シントーキョー

二人は、吹っ切れた、というより開き直ったように、先程の沈んだ空気を一変させて、街へと出て行った。

「うわー、すげーな…。」

前に述べたように、サフランが運営している下宿所は、下町の雰囲気だが、そこから一歩足を踏み出すと、そこは、最新鋭のシステムが町中にそろっていた。

この光景に田中も感嘆せざるを得ない。

「言い忘れたが、ここはな、サランダ連邦の首都、『シントーキョー』だ。」

どこかで同じような名前を聞いたことがあるが、サランダ連邦の『シントーキョー』、ここがサランダ連邦の中心地だ。

そのためか、至る所に、地方からのリニアや道路などがある。

場所的には、サランダ連邦の南東地方に属し、北の方には『ホツケードー』、西には『カーンサイ』といった都市が並び、これらは、『シントーキョー』も含めて、『サランダの三大都市』と呼ばれている。

「でもさ、今からどこに行くんだ？」

田中はふと、これからのことについて疑問を感じた。
外に出たまでは良かったが、肝心の行き先が全く決まっていなかった。

「あ、そうだな。どうすつかない。」

当のサフランも、そこら辺には、全く触れないまま出てきてしまったようだ。

「まあ、なんとかなるだろ。」

帰ってきたのは、至極無責任な返答。

しかし、田中は妙に納得してしまった。

「そうだな。何とかなるな。」

「じゃあ俺が、この町を一通り案内してやるよ。」

そういつて、二人は町の人混みへと足を踏み出した。

「これが、女性たちのファッションの聖地『105』だ。俺達は、『マルゴー』と略しているが、品揃えはすごいらしい。」

またこれも、少し惜しい場所を見つけた。

外観は某渋谷の数字三桁の店とほとんど変わらないのだが、中心にはデカデカと、『105』の文字があつた。

「んで、ここが男の聖地、『アキハバード』だ。」

「え？これが…？」

田中は、初めてこの世界と地球の違う場所を発見した。

それがこの『アキハバード』だ。

某AKBと名前はそれほど変わらず、歩行者天国なのだが、そこに構えている店が違うのだ。

「電気店もないし、メイド喫茶もない。」
「メイド喫茶…？なんだそれ。」

どうやら、この世界に『萌え』は、存在しないらしい。

しかし、その代わりに、バイクショップや、紳士服のお店などの所謂『カッコいい系』が連なっていた。

更に、この時代ではすっかりレトロになったという『東京レトロ』や、『山手線』と書いて『やまて線』と読む電車など、現在の地球にどこことなく似ているものが、このシントーキョーにあることが、短時間の散策で分かった。

更に、今やシントーキョーの顔となっているらしい『シントーキョー・ヘッド』という巨大電波塔もあるらしい。

サフランの話によると、高さが1000メートルを超える計画だと言っから驚きだ。

しかし、少しの時間の探索で、田中が一番気になったのは、やはり『リニア・モーターカー』といっても、過言ではないだろう。

更に、サラダ連邦のリニアの技術によって、宙に浮いているということが、凄い。

この場合、特定の線路がないので、磁石の位置を変えれば好きなところに行くことが出来るのである。

「うわ、かっけ。凄いな。」

現在、リニアが田中の上をちょうど通過した。

上を通過したのに、騒音も一切ないし、全く危なげなく走っていた。更に、田中からは、車体の下を見ていた。

初めての光景だったのだろう。

きつと、地球では田中が生きている間では、実現し得なかった光景に、田中は目を光らせて、リニアが見えなくなるまで、見つめていた。

「その一緒にきてる友にも見せてやりたいな。」

サフランの何気ない一言。

その一言に、田中は少し気分が落ち込んでしまった。

「おつと済まない。なんかしんみりしてしまったな…。」

サフランは、すぐに謝罪の言葉を入れた。

「いや、大丈夫だ。それより、東側には、こういう物はないのか？」

田中はふと、思ったことを聞いてみた。

すると、サフランからこんな答えが返ってきた。

「東側には、そんな町は存在しない。さっきも言ったように、資源を重んじる国だからな。」

サフランは次のようにも言った。

「そろそろ、拘束期間も終わっている頃だから、そいつも案外向こうの国が気に入っているかもな。」

サフランは、笑顔でそう答えることによって、なんだか自分にも笑顔が少し戻ったような気がした。

「でも…、俺はこっちの「シントキーヨ」の方が、何かと都合が良くて、良いと思うんだけどな。」

サフランは、感慨深げに言った。
俺もそのとき、西側の方が絶対いいと思った。

「さあ、そろそろ夜だし、帰るか。」
「え？でも、日はあんなに高いぞ。」

現在の時刻は、午後の4ラジアン半。
地球の言い方に直せば、6時くらいを意味する時間帯だ。

「太陽は、ここから急激に沈み出すんだ。半ラジアンもしない内には、完全に真っ暗だからな。」

半ラジアンは、地球で言えば、一時間弱のことを指す。
それを説明してもらった田中は、

「やば。それはやばいな。」
「だから言ってたんだよ。ほら、いくぞ。」

どことなく、急ぎ足のサフランとともに、下宿所を目指した。

No. 5 波乱の一日目、終幕

ようやく下宿舎に着いたときには、すでに太陽は半分地平線の下に隠れていた。

よく見てみれば、未だに、目に見えるほどに沈み続けている。時間的に言えば、15分位しか経っていない。

となると、その15分の間に、日が真南から西の地平線まで沈んだことになる。

田中は、少し息が上がりながら、サフランにこう言った。

「こんなに…早く…沈むんだな。」

田中が息が上がっている隣で、全く息が上がっていないサフランは、さっきまで走っていたとは思えない感じでこう言った。

「これくらいなら、まだ長い方だ。来月、同じ事したら、沈んでるからな。」

驚いた。

実は、今のこちらの世界の時期はまだ春であった。

日の高さと、暑さでは夏だと思っていた。

だが実際、地球ではまだ夏に近かったが、暦上は春だった。

そこら辺をつなぎ合わせれば、辻褄が合わないとも言い切れない。

そもそも、この世界が地球と何かの関わりがあったら、の話だが。

「さあ、これから一気に暗くなる。中に入れ。」

そうこうしている間にも、また一段階暗さが増していた。

二人は寄宿舍に入った。

実は、その後10分もしない内に、町は闇に包まれた。
そんなことはあまり気にせずに、寄宿舎で二人は話をしていた。

「夜にはお前の歓迎会をしようと思っている。」

「え！？別に気を使わずに。」

「なに、新しく入ってきた者を歓迎することは当たり前だろうが。
しかし…。」

どうやら、サフランは自分のために歓迎会を開いてくれるらしい。

「遠慮するな。いいだろ？お前等。」

「え…？」

サフランはいきなり、寄宿舎の大広間に向けて話し出した。
すると、大広間の戸がスーッと開いた。

「おう、準備はバッチリだぜ！」

「腹減った。早く始めようぜ。」

「新人さんは…、えらい背高いやないか。」

「いや、あんたが低いだけや…。」

中からは、すぐくテンションが高い四人が顔を出していた。
田中にも優しく(?)声をかけてくれている。

「おうおう、今いくから待ちな。」

サフランは、先にあのグループの輪に入ってしまった。

「お前さんは、着替えてから降りてきな。」

サフランはそう一言。

しかし田中は、実際自分の服という物は、地球からそのまま持ってきたジャージしかなかった。
サフランにそれを言っていると、

「こつちで手配済みだよ。」

そう言つて、指を指した先にいたのは、あの四人だった。

「一生懸命選んだんだぜ?!」

「大人服売り場に行くとは、やっぱり背が高いんじゃないか?」

「だから、お前が低いんだって。」

今度は、二人してのツツコミ。

最早、息があつていという域を越えていた。

「ホラ。着替えてこいよ。こいつらの服のセンスは、保証しねえーけどな。」

「……ちょ…、それどういう意味ですか?」「……」

田中は、五人の会話を横に聞きながら、自分の部屋へと向かった。
すると、自分のベッドの上に紙袋が一つ…。

「これがその袋…だよな。」

見てみると、大きな紙袋が二つ、三つパンパンに入っていた。

大人の衝動買いの二周りぐらい上をいく量である。

田中はその中で、比較的夜にあつていそうな服を着ていくことにした。

ちなみに、田中は服という物に頓着はないのだが、適当に選んだ服

にしてはまあまあの出来であった。

「これで…いいよな？」

その奇跡的な組み合わせにも、気付かないまま、下に降りていった。

「お、来たみたいだぞ。」

部屋の中から、サフランの声が聞こえた。

その声に少し緊張したが、思い切って中に入ってみた。

「こんなんでも…どうだ？」

みんなに見せてみると、みんなは何故だか固まってしまっている。
みんなの反応に、田中は恥ずかしくなって、着替えにしようと思っ
たが、

「似合ってるな…。」

「俺たちにも、『センス』ってあったんだな。」

「お前等、なかなかやるじゃないか？」

田中は無性にうれしくなった。

「ホントか？似合ってるか？」

田中は、かなり上擦った声を上げながら、自分の席に座った。

「よしっ、みんな座ったところで、やるか？」

「おっ、待ってました〜！」

「腹減ったぜ〜。」

「気にすんなって、絶対しゃべんないから。」

「それもそうだな。」

下宿舎は笑いに包まれ、そして、その日は、ほぼ夜通し灯りが点いていたという。

No.6 警告

あの大宴会が行われた次の日、田中はサフランと共に、サフランの仕事である『首都周辺の見回り』に行った。

下宿舎は、サフランが仕事に、ほかの三人は学校に行くため、何もしないままだと、田中が一人でいることになってしまう。

というわけで、一応何かすることが見つかるまで、サフランの同行をすることにした。

「今日は午前中にあがる。それが終わったら、お前のこの世界の勉強がてら、俺が一つ世間話をしてやろう。」

田中は、この世界に住む以上、この世界のことを知ろうと、サフランをお願いしていた。

「まあ、今もやってやらないこともないけどな。」

しかしサフランは、見回りをしながら話をすると言い出した。どうやら、見回りをしているはしているが、大したことは滅多に起きないらしい。

良くて、市内にある腐食した看板の破片が飛び散ったぐらい。

田中みたいな、人が他の所から広大な大地を通ってきた、なんて事は、この仕事を数十年してもお目にかかれないほど、貴重な物だったらしい。

当のサフランも、『収入は良いけど、暇がな〜。』と愚痴っていたくらいである。

「本当にのどかだな。」

本当にこの仕事があるのか、と言いたくなるくらいに、何もなかった。

そして、サフランは世間話を一つ、田中にはなした。

「実はな、この頃、サランダでは若干気温が上がっているんだ。」

サフランは、この国の抱えている問題について語り始めた。
どうやら、その問題とは『温暖化』の事らしい。

「ここ数年間で、平均気温が二度ほど上がっているらしい。」

地球では、確か300年くらい前の21世紀に同じようなことがあったと、歴史で習ったことがある。

「それって、やっぱり二酸化炭素のせいなのか？」

田中は、歴史で習った知識を活用して、サランダに質問してみた。

「なんだ？その『ニサンカタソ』って…。」

サフランは、怪訝そうな声色でこっちを見ている。

どうやら、こちらの世界では、二酸化炭素は存在しないらしい。

「確か、『カーボン・ダイオキサイド』とかいう、難しい名前だったぞ。」

田中は、驚愕した。

ちなみに、『カーボン・ダイオキサイド』とは二酸化炭素の英語名である。

その『カーボン・ダイオキサイド』という難しい言葉が使われ、二

酸化炭素という言葉がないのかは、実に不思議である。

「それを、地球では二酸化炭素って言うんだよ。」

田中は、それをサフランに教えてやった。

「へえ…、なかなか言いやすい言葉が、地球にはあるんだな。」

サフランは、それに対し、感心したようにこちらを見ていた。

「でも、その『カーボン・ダイオキサイド』発生の直接的な原因って、何なんだ？」

因みに、地球は経済成長による、急速な二酸化炭素の垂れ流しが原因である。

しかし、二日間見て回った感じでは、そのような施設や煙突などは見受けられない。

「それが、まだ詳しいことは分かっていないらしいんだ。だが、見ているように、数年前の光景とは一目瞭然だ。」

話によれば、この辺り一帯は、昔は緑に包まれていたらしいが、その数年の間に、田中が歩いていた、一面緑なし、の世界になってしまったらしい。

しかも、それが大規模だと言うから、更に驚きである。

ちなみに、田中が自分の目で見たのは、全体の何百分の一にも過ぎないらしい。

「それがまた、戦争の火種になるかもしれないしな…。」

どうやら、カーボン・ダイオキサイドの発生によって、サランダ連邦だけでなく、隣のハロルド帝国の生態系まで、脅かしているらしい。

そして、それによりハロルド帝国側は、怒り心頭、ということである。

「そ…それじゃ…。」

最悪の場合、稲葉と戦わなくてはならなくなる。
その前に、稲葉を奪還しなくてはならない。

「だが、この問題が浮上してきたのは、最近ではない。」

この問題が浮き彫りにされ、両国で議論を生んだのは、約一年前のこと。

それから、サランダ連邦には、めざましい進展は今のところ、何も見られないという。

さすがに、一年間もハロルドの警告を無視し続け、拳げ句の果てに、状況を悪化させたとなると、本当に戦争になりかねないかもしれない。

「何か打つ手はないのか？」

田中は、そうサフランに聞いてみるが、

「さつきも言っただろう？直接的な原因が分からないって。実を言うと、此処に広がっていた緑は、誰も切り倒していない。自然消滅したんだ。」

田中はその言葉に、愕然とした。

緑が自然消滅？

あり得ない。

そんなことがあっていいのか？

もしあるというのならば…

田中は、めざましい発展を遂げたシントーカーを眺めながら、こ
う囁いた。

「これは、警告…なのかな。」

「え？」

その囁き声は、とても小さな声だった。

そう、隣にいるサフランでさえも聞こえなかったほどに。

「いや、この星からの警告なのかもしれない。こんなに、一気に発
展しちまった、町に対しての。」

「つまり、その変化のスピードに、この星が追いつけなくなった、
ってことか？」

「多分ね…。」

二人の出した考察は、理にかなってはいないかもしれないが、妙に
説得力があった。

No.7 剣道

何だか、重たい空気に包まれてしまった車内。

その嫌な空気を払拭すべく、サフランは、田中に対してこんなことを聞いてみた。

「お前は、向こうの国で何かしていたのか？」

おそらくスポーツの話題だろう。

こちらの国も、地球と同じく、スポーツが栄えている。

下宿仲間も、なんらかのスポーツをしていると聞いたが、やはり地球との決定的な違いが出てきたと言っべきなのか、全く知らないスポーツ名ばかりが、出てきてしまった。

その経験があるだけに、自分のしている剣道のことを出していくのには、気が引けた。

「え…、えつと〜。」

結局どもってしまふ。

するとサフランは、このようなことを言った。

「何もしてないのか？惜しいな〜。なんなら、俺がケンドウの二つや二つ、教えてやろうか？」

田中は、よく耳慣れしている単語を言葉の中に聞いた。

ケンドウ…？剣道！

そう感じ取ったときには、サフランに何かを聞かずにはいられなくなった。

「剣道って…、どういことですか？」

「いや、剣道は剣道だよ？」

その後、話を聞いてみたら、どうやら剣道はこの世界でもあり、同じようなルールであった。

「帰ったら、少しやってみるか？」

「はい、是非。」

仕事が終わったら、少し一緒にやらせてくれるそうだ。

その後、午前中のみであった仕事は、剣道の話を筆頭に話題が膨らみ、あつという間に終わりを告げてしまった。

そのまま、見回りから市内へ戻ろうとしたとき、

「はい、止まって。」

「ヤバ。」

ちょっとした問題が発生してしまった。

それは、市内へ出入りするための検問であった。

それが問題である理由としては、田中が車内から顔を出していたことだ。

実は、行き道では、あまり素性を知られたくないとの理由から、車内に隠れていた。

しかし、帰り道では、剣道での話が弾み、すっかり車内に戻るタイミングを逃してしまった。

「おう、オッサン。いつもご苦労さんだ。」

「ええっと、サフランと、それから…。」

これは少しまずいと思ったか、サフランも検問のおじさんの気を逸

らそうとしたが、そうはいかなかったようだ。

しかし、その後のおじさんの発言に、田中は少し耳を疑ってしまう。

「田中…直人かの？」

おじさんはそこで一回、口を閉ざす。

さすがに見慣れない名前であるだろう。

しかし、その後、

「ほう、お主が昨日落ちてきた若い奴か。サフランの所で世話になつとつたんじゃない。ホレ、通つてよいぞ。」

おじさんは異世界から来た田中の存在を、認めてくれた。

というより、自分がこんなになつていたのに、少し戸惑っていた。

「まさか…、昨日のバレちゃつてた？」

サフランは、そのおじさんに尋ねる。

「当たり前だ。俺に隠し事をするなど、百年早いわ。」

おじさんは、昨日の時点から気付いていたらしい。

つまり昨日から、田中のことを認めていたという事だ。

「ま、『悪さをしなければ』、ワシもそんなに鬼じゃない。」

一点だけ妙に強調された部分があったが、おじさんは微笑みながら、田中に話した。

それに田中は、少し泣きそうになったのを堪えた。

無事に検問をクリアした二人は、町に入り、乗っていた馬車を仕事先の場所においてきた後、歩きで下宿舎まで行くことになる。その間に、サフランに剣道のことにについて聞いてみることにした。

「サフランは、剣道でどれくらいなんですか？」

早く言えば、段位を聞いているのである。

因みに地球では、力量と年功序列が基本だが、やや年功序列に偏っている部分もある。

「俺は、『四段』だな。来年くらいで『五段』も夢じゃないかもな。」

四段といえば、初段をとってから、六年位しないとれない物だ。自分とあまり年が違わないと思っていただけ少し見くびってしまったかもしれない。

ちなみに、田中が三段であるが、これでもかなり速いペースだ。更に、サフランの話では、段位を取得するための試験は、毎回一発合格であつたらしい。

「しかし、年功序列制にはかなわないな。」

サフランは、独り言をつぶやいた。

その後もつぶやく。

「後一年したら、やっと『五段』なんだよな。」

田中は、その言葉の真意について訪ねる。

聞けば、この国も地球の剣道と同じように、年功序列が物を言うら

しく、地球の剣道と同じく、段位を取得したら、一定期間の修練が必要らしい。

「審査員の人にも、『年功序列さえなかったらなく、惜しい人だ。』とか、言われちゃってな。」

つまり、今は四段であるが、それ以上の実力があるという事なのだろう。

だが、段位はしたではあるが、一応全国大会に出場する田中。それなりの強さを持っている。

「一本、手合わせ願えますか？」

田中は、少し立ち止まり、お辞儀をした。

サフランは、それに対して、そんなにかたくななくても良い、と言ったが、やはりこの国の武士道と言ったものか、

「こちらこそ、よろしく願います。」

田中に対して、やや深く一礼した。

しかし、固い挨拶はそのままに、再び下宿舎まで、話をしながら帰って行った。

No.7 剣道（後書き）

くお知らせ

一応、作者も学生ですし、これから『一学期期末テスト』や『夏休み集中補習』などがあり、簡単に更新するのが困難となってしまうしました。

ということで、誠に勝手ながら、七月の更新は、今回を持って終了とさせていただきます。

この間に、少し学業の方に身を傾けさせていただくこととなりました。

なお、次話は、8月1日（月）とさせていただきます。

今後も、変わらぬご愛顧をよろしくお願いいたします。

著者・谷口エイジ

No.8 稽古（前書き）

久しぶりな更新です。

まあ、三週間くらいあけたから、大作でしょ、とか思ってるあなた。
そんな訳ないですよ。

ってか、いつもより出来悪いかも…

下宿舎に帰ってきた。

当然のように下宿仲間の三人は帰ってきておらず、大広間は静まり返っていた。

ちなみに、三人とも高校生である。

ひとまず二人は、休憩を取ったあと、昼食の時間とした。

メニューとしては、『ご飯』『味噌汁』などの和食から、『ムニエル』などの洋食、さらには『焼売』といった中華料理まで、たった一人前の昼食に、和洋中が惜しげもなく勢揃いしていた。これがこの国の一般的な食事だという。なかなか贅沢な食事である。

「ていうか、こんなに食べられますかね？」

田中がその声を上げてしまうほどに、量が半端ではなく多かった。昨日の歓迎パーティーほどではなかったが、少なくともお昼に食べるような量ではない。

しかし、いざ食べ始めてみると、料理が余りにおいしかったためか、あっという間に、すべて平らげてしまった。

「すごくおいしかったです。ありがとうございます。でも、多くなかったですか？」

田中は、率直な感想と、同じく率直な疑問をサフランに投げかけた。

「別にいつものことさ。これくらいで音をあげたら、晩御飯は知らないからな。」

それを聞いた田中は、当分はこの国の食文化には慣れないな、と思った。

その後、食器洗いの手伝いをしながら、いろいろな文化について教えてもらった。

中には、地球でも通用する文化だったり、それをやるのは失礼に当たる文化だったりいろいろ、宇宙は広いんだなと改めて田中は感じた。

さて、それが終わった後は、いよいよ剣道の稽古にはいる。

場所へは、ここから近いらしいのだが、田中にあった道着や防具を買ったりしなければならぬので、その店を回ってから行くことにした。

「へい、いらつしゃい。」

中に入ると、かなりの高齢の老人が、いすに腰掛けて面を磨いていた。

顔がいかにも、武道一筋という顔をしており、磨いている面を見る目も、真剣である。

「おや、サフラン。久しぶりだね。今度は何を買いに来たんだい？」

その老人は、こちらを見るとすぐに立ち上がり、サフランの名を呼んだ。

「いや、俺じゃないんだ。こいつの方だ。」

そういつて、田中の方を指さした。

田中は、その老人にペコリとお辞儀をする。

「ほう、お前さんが例の事件の…」

やはり、この老人も自分のことを知っていた。

ここまで自分のことを知っている人が多いとなると、有名人という括りでは収まらない気がしてくる。

そんなそわそわした気持ちを抑えながら、竹刀などの道具を選んでいくが、その道具としても、重さや寸法などは、地球のものと大して変わらない。

しかし、価格としてはこちらのほうが、比較的安価である。

「こんなに安くていいんですか？」

地球とでは、通貨が違うからかもしれないが、いろいろな相場の相対的観点からしても、こちらのほうが比べ物にならないくらいに安い。

「まあ、この国では、剣道は盛んだからね。一般的なものは、工場で大量生産されてたりするから、コストがそんなにかからないんだよ。」

詳しく聞いてみたところ、サランダでは、スポーツの中では一、二を争うほどの人気スポーツであった。

そのためか、大量生産でないと生産が追いつかないらしい。それにつられるように、コストも安くなっていったらしい。

店を出て、道場へ向かっている途中でも、ところどころで、剣道の道具を持っている人を見かけた。

道場へ着いてみると、先客はすでに何人もいて、みんな思い思いに剣道を楽しんでいる。

田中は、その光景を見て、すごく懐かしいと思うとともに、

『稲葉も向こうで楽しんでいるといいな……。』

と友達のことを思った。

いざ、稽古を始める。

そして、防具もつけてみるが、あまり違和感はなく、代わりに、こんなにフィットしすぎて良いものなのか、と違う違和感が浮かび上がってしまうくらいなのだ。

「よろしくお願いします。」

勿論、サフランが上座に座り、二人はお辞儀をした。

先ずは、基本打ちからおさらいを始める。

ここは特に、サフランは言うことはないようだ。

基本が完璧なら、強い証拠でもある。

「よし、実践練習するか。」

サフランの一言で、実践練習へと移行した。

実践練習は、大体が試合形式で行われる。

つまり、サフランは田中と『サシ』で勝負するつもりらしい。

実の所サフランも、田中がここまでやれると言うことには、驚いている。

二人は、蹲踞をしたまま、お互いを見つめる。

『ドン！ー！』

いきなり大きな太鼓の音が鳴った。

本物の太鼓の音ではないが、スピーカーから出ているらしいその音は、殆ど生の音にしか聞こえなかった。

両者共に、間合いを整えている。

と、そのとき、

「行くぞ！」

先に仕掛けてきたのはサフランである。

面を打ってきたが、寸での所でかわす。

実は、この避け方は作戦であり、相手に空振りをさせ、素早く打ち込むのであったが、きれいにサフランは引かなかった。

案の定、サフランの面は空を切り、素早く回り込んだ田中が面を打ち込む。

しかし、完璧であった作戦は、最後に突き崩される。

田中の面は、何故か空を切ったのである。

更に、体勢が悪くなっていたサフランはそこにはいない。

そして、最新鋭の機械からは、サフランの『胴あり』を示すランプが光っていた。

No. 8 稽古（後書き）

これからは、週一回以上の通常更新に移ります。

みなさん、ご迷惑をおかけしましたことを、お詫び申し上げます。

No.9 強さ

完全に自分の勝ちだと思った。

しかし、そこには面を打ったという感触はおるか、サフランの姿がない。

更には、自分の負けを示すランプが。

田中は、一瞬何が起こったのかが、全く分からない現象に陥った。すると、先程の一瞬の出来事のリプレイが、大きなスクリーンに映し出されていた。

田中はその動きを目で追った。

「俺が避けて、振り返って、打って…あれ？」

田中はその決定的な瞬間を見破れなかった。

何せ、大振りをしてから体制を少し立て直しているサフランが、次の瞬間には、自分の反対側にいるのだ。

すると、都合よくリプレイは、打った瞬間をスーパースローで映してくれた。

「嘘だろ…。」

そこに映し出されていたのは、体勢を立て直したが、依然後ろをとられたままのサフランが、田中が振りかぶった瞬間にむき直し、そのまま抜き胴を食らわせていたのだ。

しかも、田中の面をしっかりとかわして。

「嘘だろ…。」

田中はもう一度そのシーンをじっくりと考え直して、同じ言葉をつ

ぶやいた。

「うーん…、少し遅かったかな？」

それはもちろん、サフランの声。

サフランは、この一連の動きに少し不満があるらしかった。

「もうちょっと、あの部分をカットしたら。」

田中がみた限り、サフランに無駄な動きは見受けられなかったが、サフランは自分の動きに無駄があつたらしい。

「あ、あの…、あれは何だったんですか？」

田中は、サフランにおそるおそる聞いてみる。

「え？あ…あれかい？」

サフランは、別にいつもの調子で、未だリプレイされているモニターを見た。

「あれ、どうやってやったんですか？」

あの技に、何かトリックがあるのではないかと、問いかけてみたが、

「いや、別に…。普通に鍛錬したら。」

一つの文章にしたら、『普通に鍛錬をしていたら、出来るようになった。』そういった感じた。

しかし、普通に鍛錬したところで、あんな技術が身につくわけがな

い。

再び問おうとしたら、サフランの方から田中の評価が始まった。

「なかなか筋はいいな。あの三人よりも動きがしっかりしている。」

そりやまあ、一応。

田中は、心の中でそう呟いたが、次の一言に啞然とした。

「動きが遅すぎるな。そんなんじゃ、この国では通用しないぞ。」

つまり言うなれば、サフランほどの速さを修得しなければ、この国のほとんどの人には、適わないらしい。
下宿仲間のトリオでさえ、サフランの速さに付いて行っているらしい。

「でも、速いだけが強さじゃないしな。」

サフランは、いきなり深い言葉を放った。

「速いだけが『強さ』じゃない、技術力が高いだけでも『強さ』じゃない、両方がついているだけでも『強さ』じゃない。」

田中はその言葉を真剣に聞き、その先の真の言葉を求めた。

「その二つの混ざり合いがうまい者が、初めて『強い』と呼ばれる。」

サフランはそういきった。

確かにその通りだと思った。

剣道などの試合において、技術力の高さを相手に見せるためには、

それ相応の瞬発力がある。

技術力が高いと威張ったところで、相手の攻撃への反応が遅れると、一本とられかねない。

逆に、瞬発力がずば抜けているだけでは、チャンスに鋭い切り込みが出来なかつたりする。

その二つのベストな組み合わせが、強さを生む。

「よし、今日はここまで！早くしないと日が暮れちまう。」

現在時刻は、午後4ラジアン（午後5時30分近く）を過ぎたあたり。

深い話をしている間に時間が経ってしまったのだろう。

ここから下宿先まで帰る頃には、ほとんど空が闇に包まれる時間帯である。

「今日の晩ご飯は、『焼きそば』だぞ？」

この世界でも『焼きそば』は、『焼きそば』らしい。

「僕も手伝いましょうか？」

日本男子たるもの、焼きそば一つ手伝えないでどうするか、と父に言われていた田中は、手伝うよう申し出た。

「ああ、じゃあお願いするよ。」

帰るための支度が済んだサフランは、荷物を持ち上げながら言った。

急いで、下宿舎まで帰るわけだが、そのときでも、太陽が急激に傾き始めているのを見ることが出来た。

そして、下宿舎にたどり着いた頃には、太陽は3分の1ほど沈んでおり、まさにギリギリセーフといったところだ。

中に入ると、既に下宿仲間が控えており、「今日の夕飯は何だ？」やらなんやら、聞こえてきて、「焼きそばですよ。」と田中が言うのと、いきなり三人はハイタッチをし始めた。

どうやら、かなり好きな食べ物らしい。

仲間の三人も加わり、焼きそばの準備をしているときに、一本の臨時ニューステロップが流れた。

『ハロルド帝国、異世界の少年を軍に配属。』

そのテロップは数十秒にわたって流されたが、幸か不幸か、全員が焼きそばの準備に追われ、そのテロップを見た者は一人もいなかった。

No.9 強さ(後書き)

すみません、いきなりの持論展開…。

なお、今回は、500PV/日越え(実数値607PV/日)(8/1)を記念して、1〜2話くらい、『稲葉編』をお送りいたします。

No.10 ハロルド帝国（前書き）

500PV／日超えを記念した、稲葉編です。

No.10 ハロルド帝国

田中が落ちた2〜3日前に、稲葉は、『東側』のハロルド帝国に落ちた。

地球では一日違いだったが、この国では、何倍もの差が生まれている。

稲葉が落ちた場所は、早く言えば、民家の庭のど真ん中であつた。だから、すぐに発見されたし、田中のように長い距離を歩いていくこともなかった。

しかし、東側に落ちた稲葉には少し苦労したことがあつた。

『言語』である。

ハロルド帝国では、地球での『英語』に近い言語が使われていた。まあ、何故近いという表現をしたかと言えば、少しアクセントが違ってくる。

それ以外は、英語とは何ら変わりはない。

しかし、残念なことに、稲葉の英語の成績は芳しくなかった。

『語彙』や『文法』は、まあまあ出来るらしいのだが、その応用となるとでんでダメらしい。

つまり、基礎は出来るが、それをうまく活用できないということである。

しかし、先程も述べたように、基礎は出来ているのだから、ゆっくり解釈をしていけば、全く分からないということは、免れた。

なお、ここでちょっとした業務連絡だが、ハロルド帝国の会話は、すべて日本語に翻訳するので、ご了承願いたい。

「ここは、一体どこですか？」

稲葉の発言。

ハロルドの独特なアクセントがあるのだが、それは棒読みによって解決された。

確かに、稲葉にしてみれば、大会からの帰り道に、いきなり此処に落とされたのだから、疑問に思わないのも無理はない。

そして、このときに稲葉の中では、なんらかの奇怪現象であるということは、念頭に置いていたようだ。

「どこつて…、ここは『ハロルド』じゃないか。」

落ちた先の庭の所有者であるおばさんは、庭の木々に埋もれている稲葉を助けた。

「ハロ…ルド？」

稲葉は思わず聞き返してしまう。

いくら、稲葉の中で『奇怪現象』だと分かっている、いきなり聞いたこともない名前を出されたら、困惑する。

「そうだよ。ハロルドだよ。……ちょっと、こっち来な。」

稲葉が空から落ちてきたときの音を聞いた近所の人たちが、何事かと集まりだしてきた。

おばさんは、それを気にしたのか、稲葉を家の中に入れ、すべての窓のカーテンを閉めた。

「お前さん、一体どこの子だい？空から落ちてくるし、ここはどこだとか聞いてくるし。」

おばさんは開口一番にそう聞いてきた。
なかなか稲葉には答えにくい質問だ。
そうやって、稲葉がもっていると、

「言えないなら、それでいいよ。」

おばさんは、何かを察したらしい。
皆まで言わせることはなかった、

「まあ、ひとまず、お前さんはこの国の人間じゃないんだな？」

おばさんは、皆まで言わせなかったが、かなりストレートな質問をしてくる。

「まあ…はい。」

しかし、事実は事実なので、稲葉は肯定を示した。

「一応、明日どこかの役所に行ってみな？何か分かるだろうし…。」
「はい、分かりました。」

おばさんは、その後も何かと稲葉にアドバイスをくれた。
しかし、稲葉がおばさんの名前を教えてもらおうとしても、『いやいや、私はただのおばさんだから…』と言われて、はぐらかされた。
なんだか怪しい…。

（翌日）

あのまま、稲葉は、寝るところまで、貸してもらった。
その後、先に寝たのは、稲葉だったので、おばさんがどこで寝たの

かは知らない。

更に、稲葉が起きた頃には、すでにおばさんは家にはいなかった。そして、机の上には、朝食と、

『あなたの朝ご飯よ。食べて、お役所に行きなさい。』

と書かれていた置き手紙があった。

稲葉は、朝食を済ませた後、ちゃんと食器を洗ってから、自分とともにも落ちてきた荷物を持って、家を出た。

そして、外にいるであろうおばさんに、感謝を言おうとしたが、見渡した先におばさんは居なく、挨拶も出来ないまま、役所に向かった。

「確か…このあたりにあるはずじゃ…。」

稲葉は、置き手紙の裏にかかれた、一番近い役所の地図を見ながら、町中を歩く。

「あ、ここか。」

着いた先には、大きな役所。

地方の役所にしては、大きすぎやしないか、と言っくらいの大きさがあり、完全に大通りの一角を占領していた。

「え？でかつ！」

その大きさに稲葉も度肝を抜いていた。だが、怖じ気付いてばかりも居られない。

稲葉は、意を決して、役所に向かった。

稲葉は、大きなお役所の中にいた。とはいっても、一地方役所である。

だが、その中は大勢の人でごった返していた。

ひどいところでは、ディ ニーランドに来たかのようにくらい並んでいる。

そんな一角を横目に見ながら、正面にある館内図を見た。

その中には、一つのフロアに入るだけ部署を詰め込んでおり、それが十数回にも及んでいる。

稲葉は、なるべくすべての部署を、見て回りながら、どこに行くのがふさわしいかと、考えあぐねていると、こんな記載を見た。

『14F 異世界人相談所』

名前からして、めばしい場所である。

稲葉は、一応最後まで目を通して、一番めばしい『異世界人相談所』に向かうことにした。

早速、エレベーターで14Fまで上がる。

扉が開いた瞬間、思わず稲葉は絶句した。

一階の喧噪とは打って変わって、『違う階に来てしまったのではないか?』と疑ってしまうような、人の無さだった。

ちなみに、向こうの職員も『久しぶりのお客さんだ。』と言わんばかりに、こちらも凝視している。

このままではどうしようもないので、取り敢えず、稲葉は受付らしい人に確認をした。

「『異世界人相談所』は、この階ですか？」

「い、異世界人相談所ですか？……はい、あちらになります。」

受付の人の声が若干裏返ってしまった。

稲葉は少し不審に感じながら、指さされた方を向くと、担当員だろうか、こちらに向かって手を振っていた。

「ありがとうございました。」

稲葉は礼を言うと、相手はなぜか急いで頭を下げた。

動揺でもしているのだろうか……。

ともかく、先ほど手を振っていた担当員の方に向かって歩いていった。

すると、何故か同じ階の部署の人まで、自分の仕事を放り出して、一力所に集まってくる。

無論、それは、異世界人相談所にだ。

「さて、いきなりで悪いんだが……、なぜ君はここにきたのかね。」

稲葉が目の前のにすに座った瞬間に、担当員にいきなりこんな質問をされた。

「なぜって……、ここに用があるからですけど……。」

担当員の、答えが至極簡単な質問に、少し語尾が呆れ気味の稲葉。

「おっと、すまない……。じゃあ、この質問をする。……どういう訳があつて、ここに来たんだ？」

次は、核心に迫った質問だ。

そして、なぜか周りにいる他の部署の人たちも、頷いている。

稲葉は、昨日起こったことを、事細かに説明した。

地球というところから来たこと。

気がついたら、人の家の庭に落ちていたこと。

その人から、ここに来たら何とかしてくれる、と言われたこと。

それを聞いた担当員は、いきなり立ち上がって喜びだした。

「やった、遂に俺は生き証人になったぞー！！」

「はい、…え？」

予期しない展開に、思わず軽いノリツツコミの稲葉。

更に、担当員は、自分で喜ぶだけでは収まらず、自分の横に座っている他の部署の人たちに向かって、ハイタッチをし出した。

当の稲葉は、何が起きているのかわからない。

「あの…、皆さんどうしたんですか？」

たまらず稲葉は、まだハイタッチを続けている担当員に事情を聞いてみた。

「おっと、すいません。実は、こんな伝説があるんです。」

するとその人は、昔に起こった、今でも伝説として語り継がれていることを話してくれた。

今から526年前、その一回だけ東側と西側が、対立したことがあった。

その戦争は日を追うごとにひどさを増していき、二ヶ月ぐらいたった頃には、両方とも、ありったけの兵力をつぎ込む総力戦。

するとそのとき、両陣営ともに、『人が降ってきた。』と言う伝令が入った。

その知らせに、一時休戦という形になって、実体の解明に急いだ。すると、二人は両方とも、異世界から来たらしい。

そして、二人の供述に共通点があることから、両陣営は、二人を会わせてみると、いきなり涙を流しだした。

どうやら、友達同士だったらしい。

そして、二人が再会の抱擁をしたとたん、二人から光があふれ出し、次の瞬間には消えていたという。

そしてその時、両陣営の頭から戦争の話は消えてしまい、なし崩しに終戦を迎えた。

そして、その終戦を迎えさせてくれた二人に敬意を払い、今の年号になった。

「だから今年が新暦526年……ってわけだ。」

担当員は、語り終わった後、僕を恍惚とした目で、僕をみた。

「頼む。君の力が今、必要なかもしれない。」

稲葉は、いきなり重い役目を背負ってしまいそうで、少し固まってしまった。

「今、この国がどうなっているかは、君も承知のはずだ。」

多分、サランダとのこう着状態のことだろう。

稲葉には、だいたい予想がついていた。

何故なら昨日、庭に落ちたところの主のおばさんに、この話を耳に

たことができるのではないかというほど、聞かされた。
しかも、そのときのおばさんの目も恍惚としていた。
このままでは、救世主扱いされる、と思った稲葉だったが、それも
悪くないな…、と想着てしまった。

「分かりました。できるだけ努力します。」

稲葉はあっさり、承諾してしまった。

「そうか！これは、王に連絡を取らなくては…。」

遂に、国を挙げての大事に発展してしまった。
さてどうなることやら…。

No.11 稲葉の決断（後書き）

一応、稲葉編は、ここでいったん終了です。

これ以上書くと、本編の設定を忘れてしまいそうだからw

次回からは、再び、田中編に戻ります。

尚、若干修正点がありましたので、加えさせていただきました。

ご迷惑をおかけします。

No.12 田中の成長

次の日、新聞を何気なく読んでいた田中は、ふと思った。

「あれ？俺なんで新聞が読めるんだ？」

今考えれば、不思議な話だった。

まだすべてのことが分かり切っていない、この異世界の新聞が、読めている。

どこで詰まるといったこともなく…。

あまりにも不思議で仕方がなかった田中は、サフランに聞いてみた。

「昔、何かあつたんですか？」

それは唐突な質問だった。

全く話の筋が読めないサフランは、『へ？』と間拔けた声を出してしまう始末。

「え…、や…あの、すいません。」

田中はつい謝ってしまう。

悪い癖である。

「いや、いいんだけど…、どうしたんだ？いきなり。」

サフランは、そのことについてあまり気にしていないようである。

「いや…、どうして俺、新聞読めてるんだろう…、と思ひまして。」

田中は、あの唐突な質問のわけを話した。

サフランは、そのわけよりも、田中がこの国の言葉が話せるだけでなく、字も読めるということの方に食いついた。

「え、おまえこれ読めんのか。」

サフランの目には、子供のような無邪気な感じであった。

「まあ、前から薄々気付いてたんですけど…、今日の新聞の一見で確信がつかしました。」

確かに、田中が最初にこの下宿舎に来たときにも、そのような表記がされている。

この事については、No.3を参照してもらいたい。

「じゃあさ、これは？」

少し田中よりも年上で、お兄さんの存在だと思っていたサフランの無邪気な目は、変わることはなく、確かめるためだろうか、問題を出してくる。

指さしたのは、『反面』

「『はんめん』…でしょうか。」

地球ではそう読む。

「すっげえ、おまえ凄いな？」

こちらの世界でも、『反面』は、『はんめん』だった。

「じゃあ、これは？」

書いてあったのは、『髑髏』。

なぜかこの言葉が、新聞に使われていた。いったいどんな記事なのだろうか…。

「『どくろ』…ですか？」

普段はカタカナで表記されることが多いこの字。

「正解だぜ。この字覚えるの苦労したな…。最初みたとき、暗号かと思った。」

こちらの世界では、惜しみなく漢字を使うのが一般的なようだ。

この後も、いろいろ質問に答えていくうちに、ほぼその場所の見開き2ページ分を読み終えてしまった。

みた感じ、日本語と代わりがなかったらしいが、ひとつだけ…。やはり、漢字が多かった。

普段は、画数が多いため、カタカナにされやすい字や、一般人にはとうてい読めないといった漢字が、つらつらと並べられ、一文のほとんどが漢字である文章もあった。

「さて、そろそろいくか…。」

二人の間で漢字の件が終わった途端、サフランは顔を変えて、立ち上がった。

まるで、田中の最初にした質問に行かせないかのように。

田中はその時、鋭い勘で、

『今は、追及するべきではないな…』

と、察知した。

いつか話してくれるときがくるだろうと…。

現在の時刻は、午前の8ラジアンほど。

地球時刻でいう、11時前くらいの時間帯。

これから、昼をまたいで剣道場にこもるという。

田中もせっかくなので、同行させてもらうことにした。

下宿舎から、道場までの道のりは、違う話をした。

田中もそのところは、あえて追及しなかった。

道場に着くやいなや、『一発やってみないか?』と、サフランが言ってきた。

昨日のこともあり、若干乗り気ではなかったが、田中はそれを承諾した。

『時間無制限・一本勝負』

大スクリーンにはそう映し出されている。

この状態は昨日と変わらなかった。

ちなみに、この世界では、高性能なカメラが四方八方に配備されており、主にビデオ判定用に使われ、昨日もあった『リプレイ』機能や、反則や技の入り具合を判定する『審判』機能がある。

だいたいの技は、審判機能で判定されるが、残り時間ぎりぎりの技や、コンマゼロ何秒という世界での、細かい技の時に、リプレイ機能が使われる。

更に、本数引き分けとなった際には、動きの軽やかさや、勝負を仕掛けた度合いによって、優勢勝ちを決めたりすることもできる。

機械から出される始まりのブザーとともに、二人は、蹲踞の状態から立ち上がった。

にらみ合いが続いている。

田中は、昨日のことがあるために、下手に動けないようだ。最初に動いたのは、サフランだった。目にも留まらぬ、鋭い面うち。

『バアアアーン!!』

凄まじい打突音がしたが、どちらのランプも付かなかった。

「っ…」

「へえ、もう止めるか。」

そう、田中は、サフランの光速の面うちを、早くも止めたのだ。当の本人は、かなりギリギリだったみたいだが、それでも、ある程度見切ることが出来始めた。

「なら…、これはどうだ?!」

『バアアアーン!!』

今度は、胴への一撃。

面うちの時よりも早く、どうやら、竹刀五と持って行くつもりだったらしい。

だが、これもランプは付かない。

田中によつて、見事に一歩手前で封じ込められてしまっていた。

田中の方は、かなり必死な感じであり、技をいれ終わって、無防備なサフランのことさえも、気にしていられないようだ。

「なかなかやるな…。」

サフランも、言葉ではそう言っておきながら、内心では、驚いていたのかもしれない。

「だが、これで決める！」

『ヒュ…パシイン!!』

今度は、空気を切る音まで聞こえた。入ってきたのは、小手。

「っ…くっ。」

これにも、田中は反応した。

しかし、無情にも、サフランの方にランプがもった。

これにより、田中は緊張の糸が切れたのか、フツと息をこぼした。礼をした後、リプレイが流れた。

リプレイによると、サフランの攻撃を田中はギリギリで追いついたが、それごとサフランに持って行かれてしまっていた。

少し落ち込んでいるような田中の耳に、サフランの声が入ってきた。

「お前、すぐに俺を抜かすかもな…」

「え？」

それは、独り言のようにも聞こえた。

No.12 田中の成長（後書き）

（お知らせ）

皆さん、いつも御閲覧ありがとうございます。

・ユニーク通算1000人（実数値通算1002人：8月22日終了時点）

・通算5000PV（実数値通算5148PV：8月24日12時時点）

越えを記念し、再び稲葉編をお送りします。

進行具合的には、No.9の最後らへんにちらつと書いた『稲葉が軍に配属される』までです。

最悪、一ヶ月を超えてしまうかもしれません…

なお、No.13の本編の後、No.14からとなります。

これからも、変わらぬご愛顧をよろしくお願いいたします。

（著者・谷口エイジ）

No.13 天才の素質

「お前、すぐに俺を抜かすかもな…」

「え？」

サフランの独り言は、田中にも十分聞こえていた。

昨日も、そして今日も、サフランに圧倒的な力の差を見せつけられたにも関わらず、何故、当のサフランから、そのような言葉を発するのか、分からなかった。

「どういう事ですか？」

田中は思わず聞いてしまう。

「いや…こつちの話だ…。」

しかし、サフランはそのことについて、口にしない。

「ほら…、もうすぐ昼だぞ。飯の時間だ。」

そう言っつて、サフランは、コンビニ（地球でいう『コンビニ』）で買ってきた弁当を開き始めた。

結局、サフランには、あれ以上のことをいうどころか、はぐらかされてしまった。

「はあ…、わかりました。」

一方の田中の方は、何か腑に落ちないままである。

時刻は、正午すぎ。

始めてから一時間、鋭い入りや、裏をかいた攻撃が、サフランから浴びせられたが、結局入ったのは、あ的一本だけだった。それだけでも十分凄いのだが、それだけでない。

田中は、防戦一方だった昨日から、今日は、時々攻勢に転じてみたりと、だんだんと余裕も出始めてきた。

しかし、その攻撃はサフランによって防がれるのだが…。

「よし、また始めるか…。」

時間は、午後の半ラジアン前。

地球でいうと、0時40分前である。

30分位で、昼食を食べたことになるが、そのあと、またすぐに稽古に入るらしい。

このまま、4ラジアン、5時20分くらいまで、稽古をする。

「はい。」

しかし、田中はそれを別に苦と感ずることはないようだ。

大会前では、そんなことは当たり前であつたということもある。

しかし同時に、田中は、剣道に対してなら、それくらいのことは大丈夫なのだ。

昼食の弁当を片づけ終えた瞬間、二人はまた準備をし始めた。

「よし、来い!!」

準備をし終えた二人。

先に声を上げたのは、サフランだった。

田中は、その声に反応して、サフランにつっこんできた。

「やあああああー!!」

そう叫んだ後、田中はサフランのそれにも負けられないような、鋭い面うちを食らわせた。

「カアアアアン!!」

竹と竹が激しくぶつかる音。

その音は、防音設備が整ってるこの部屋でさえも、防ぎきれないほどだ。

少し、その音は小さくなるのだが、外の廊下を歩いている他の人も、ビックリしてしまうほどだった。

なお、どちらも一本は入っていない。

ちなみに、何でもはかるモニターでは、先程の攻撃の威力が表示されている。

『726 kg』

かなりの衝撃がかかっていることが伺える。

しかし、それを受け止めたサフランの腕と、竹刀の強度には、ただ驚嘆するばかりである。

しかし、そんなこともいつてられないのが、今の二人である。

今このように説明している間にも、二人の打ち合いは続いていた。

それは、どこぞのアニメでみるような、目にも留まらぬ打ち合いである。

『カン、カカカン、パアアン!!』

竹刀と、踏み込んだ音が絶え間なく流れていたが、一つだけ違う音が入った。

胴打ちが入ったのだ。

それを打ったのは、田中だった。

しかし、一向にランプは付かない。

そのかわりに、審議ランプがついた。

ビデオ判定のようらしい。

『パアアン！』

完全に田中の一発は、サフランの胴にきれいに入っている。

しかし、少し甘く入ってしまったらしい。

この世界では、打ったときの威力によって入ったか入ってないかが決まる。

その規定は、100kgなのだが、田中の威力は、

『94kg』

わずかに足りなかった。

なお、審議ランプがついたときは、一時試合が中断される。

そのために、審議中は、誰も打ち込むことも、打ち込まれることはない。

そして、再び合図になった。

『危なかったな。本格的に、明日にはこえられてるんじゃないか？』

それがサフランの出した、率直な感想だった。

No.13 天才の素質（後書き）

予告通り、次回から、稲葉編（救世主疑惑）軍隊の入隊）

No.14 王との謁見(前書き)

稲葉編(2)です。

2、3話くらい引つ張ると思いますが、これが終わると、しばらく本編が続きます

No.14 王との謁見

一方、稲葉の方では、田中がちょうど落ちてきた当日、ハロルド帝国の王との謁見があった。
内容的には、ただ王にお会いするだけなのだが、非常に盛大な物になっていた。

「おお…、あなた様が救世主でございますか。」

ハロルド帝国の王が、直々に出迎えに参られ、さらには敬語まで使っている。

非常に珍しい光景だ。

「これはこれは、滅相もございません。」

稲葉は、国王が自分に向かって頭を下げるのを見るやいなや、自分もそれより更に深く、頭を下げた。

臣下たちは、王が頭を下けているのは初めてだ、といわんばかりに、ざわめいている。

「早速で悪いのだが…。」

王は、いきなり切り出してきた。

「我が、王立陸軍に入っただけないだろうか？」

「……は？」

稲葉は、思わず頓狂な声を上げてしまった。

一応いっておくが、この会話の流れは、ノーカットである。

つまり王は、序章をすっ飛ばして、単刀直入に言ってみせたのだ。

臣下たちのざわめきは、大くなるばかり。

中には、『今日の王は、どこかおかしい。』と言う臣下もチラホラ。

「あの…、それは一体…。」

稲葉は、王に真意を問う。

「あなたのような救世主様の力で、この国を救っていただきたいのだ。」

救世主様という大それた名前を付けられた稲葉。

その稲葉は、もはやどこからツツコンでいいのか、全く分からなくなっている。

臣下たちも、ため息をつき始めた頃、勢い良く、後ろの扉が開かれた。

「父上、そのような急な切り出し方は、やめてくださいと、何度言ったらわかるのですか。」

王のことを『父上』と名乗るひとりの女の人が見えた。

臣下たちは、いきなり開かれたドアの先にいたその女の人に、軽く礼をする。

「メリエル！…すまない、癖でな。」

王はその人を『メリエル』という名で呼んだ。

稲葉はようやく、その人が誰なのかがわかった。

実は、謁見の前に、少し予習をしていたのだ。

それは、失礼に当たらないようにすることなのだが、余りに城下で王家の話題を聞くようで、少し好奇心もあった。

稲葉は、メリエルという名前を聞いたとたんに、『なるほど…王様が頭が上がらないのも頷けるな。』と思った。

稲葉の好奇心の根源ともいえるのが、この二人の関係であった。実は、こんな一説があった。

『陛下、今日も王女殿下に負ける。』

『陛下、口喧嘩自己ワースト18連敗。』

新聞の一面には、こんな感じの記事が踊っていた。

まあ、それ以上に大事なニュースがないだけ、平和と言うことを表しているのかもしれないが、事情を知らない人を見ると、つい好奇心をくすぐられるような記事である。

「癖癖って、これで何回目ですか!？」

そのような昨日のエピソードを思いだしていた稲葉は、王女の怒号ともとれる声に、今に引き戻される。

臣下たちは、『また始まった…。』というような感じで、戦況を見つめていた。

「32か…」

「33回目です!！」

王は、最後まで言葉を発することができなかった。

稲葉はこの時、別の記事でみた『陛下、これで4勝49敗』という記事の『4勝』の部分が見てみたくなった。

そして、それと同時に、明日の記事には、『50敗目を喫する』か『連敗記録を19に』のどちらかが一面を飾るのだろうな、と勝手

に考えていた。

そうやって、まだ喧嘩をしている二人の間で、困っている稲葉。実際は困ってはいないのだが…。

それを助けるように、二人の口げんかよりも大きな声が響き渡る。

「そこまで〜!!」

その大きい声に、臣下や稲葉どころか、未だ熱い戦いを見せている二人でさえも、耳をふさいでしまった。

その大きな声を出した張本人が、部屋の中に入ってくる。

「母上！」

王女の声。

王女が『母上』と名乗る人物なら、王妃にあたる方である。

しかし、稲葉はどこかで見たような感じの人だった。

どこかははつきり思い出せないらしい。

その稲葉の顔を、『オロオロしている』と捉えた王妃は。

「全く、王家が二人もそろって、何ですかこの有様は…。」

王と王女を怒鳴りつける。

「だって父上が…。」

「お黙りなさい。いかなる理由があっても、お客様の前で、そんな事してはいけません！」

王妃は、王女の抵抗を一瞬で排除する。

その顔は、まるで『鬼』をも連想させる。

「あなたもあなたです。お客様を困らせないような、言い方はありませんこと?」

この光景をみた中で思うことは、一般家庭での親子の地位を表しているよう二毛力感じられる。

母親は絶対的、そして、息子・娘に、口で勝てない父親のような。

さて、王妃の公開説教により、カオスな状況から立ち直った、謁見の場。

「まあ、答えは今じゃなくても良い。自分の気持ちが固まったら、またこちらにきてもらいたい。」

久し振りに、本来の職業に戻ったといっても良い王様は、そう稲葉に告げる。

「わかりました。」

そう稲葉告げると同時に、謁見の時間が終了した。

実際には、半分以上の時間が、王家の親子喧嘩に終わったわけだが、それでもほかの少ない時間で、何とか最重要事項は、話をする事ができたわけである。

稲葉は、やることが終わったので、早急に城を出て、ホテルに向かうことにしたがその間に、稲葉は今回のことについて気になったことを、少し考え始めていた。

その気になったことといえば、王妃のことである。

「誰かに似てんだよね。」

確か、俺が落ちた時に、助けてくれたおばさんに…。

「まさか…」

「まさか…」

稲葉の頭の中では、いろいろなことが渦巻いていた。

既に王様に返す返事は出来ていたのだが、稲葉的にはそうはいかないらしい。

「もうちょっと、調べてみるか…。」

いつの間にか、本来の目的を忘れ、探偵気取りになってしまった稲葉は、今考えてみれば、そちらの方が生き生きしていたのかもしれない。

さて、そうと決まれば行動に移すのが、稲葉である。

ホテルに戻ると、今まで予習用に使っていた新聞を、今度は、もう一つの目的のために使い始めた。

新聞をくまなく、一字一句逃さず見ていく。

そして、それらしい記事があれば、その記事に目を通す。

そんなことを繰り返しているうちに、正午にならないうちに終わった謁見の時間、そのすぐ後から作業を始めたが、もう外は夕闇に染まっていく。

時刻は、午後の5ラジアン15分。

この世界は、時間はラジアンを使うのだが、それよりも小さい単位は、分、秒を使う。

ちなみに言えば、地球で言うと、丁度7時。

夏場のこの星で言えば、急激に日が傾く時間帯である。

実際に、少し目を離して、もう一度見てみると、太陽の欠け方が一

目瞭然である。

「お夕食はどういたしますか？」

部屋の外からの声。

ホテルマンが、もうすぐ近づいてくる夕食の時間について聞いているのである。

「中に入れといてください。」

稲葉はそう言つて、寝室に入つていった。

ちなみに、部屋は二つあり、寝室とリビングに分かれている。

稲葉は、一回寝室へと移動する。

その理由は、結構みんなに顔が知れているからだ。

実際に、テレビがないハロルド帝国。

しかし、かといって、情報を得るものが一切ないわけではない。

それは、この地球でもある、新聞だ。

前話述べた王家の喧嘩の件も、新聞であつたのは、皆さんも覚えていただいているだろう。

実は、稲葉の登場は、新聞の一面のほぼ90%くらいを占めていた。更に、ハロルド帝国では、この新聞がほぼ唯一の情報源であるためか、新聞の購読率が100%近い。

つまり、誰もが、稲葉のことを知っている形になり、なにもしないまま一歩外にでてしまうと、正体がバレかねないことになっている。そのため、変装をしている状態の時以外は、人前に顔をさらさないようにしているのである。

「では…失礼します。」

ホテルマンが部屋から出ていった。
再び稲葉は部屋に戻る。

ホテルの支配人など、一部の人は事情を知っている。
しかし、他の人は全く事情を知らない。

いくら、王様が直々に手配したといえど、国のトップ・シークレットになるような人の情報を易々と出すことはできないのであった。

「さて、晩飯にするか…。」

稲葉は、調べ物を一回やめて、出てきた夕食に手を付け始めた。
その時には、もう夕日は沈んでいた。

〓 次の日〓

すでに、王様との二回目の謁見は、夕方と決まっていたのだが、稲葉は王様に対する返答は決まっていたので、再び王妃とあの女性のことについて、調べていた。

すると、過去の新聞より、興味深い記事が現れた。

『王妃、またもや脱走。今度は、謎の置手紙。』

これは、稲葉が異世界に来た当日の新聞である。
さらに、稲葉は読み進める。

『置手紙には、「時が来ました。」の一言のみが記されており、そのほかには何も書かれていなかった。』

つまり、稲葉が落ちてくる前日に、王妃は何かを予知していたのではないか、という予想が立てられる。

ちなみに、前述した『予習』で、『王妃には、予知能力があるらしい。』ということも分かっていたので、別段稲葉は驚いてはいない。しかし、逆に王妃への疑念は募っていくばかり。そして、別の記事に、核心に迫る記事が書かれていた。

「こ…これは…。」

あまりに、核心までストレートに行ってしまったので、稲葉はびっくりするしかほかなかった。

く夕方く

ついに、二度目の謁見の時間になった。

稲葉は、民衆にばれないように、帽子を深くかぶって城へと向かった。

そして、今日手に入れた衝撃的な出来事の真相も持つて。

「陛下、二度目にお目にかかります。」

早速城に着いてから、ほとんど顔パスで、部屋まで通された。

「おお、来てくれたか。お主の中の答えは、決まったのか？」

相変わらず、単刀直入さが表にでている王様。

それを横で見ている臣下たちはおろか、王女や王妃も、もはや溜息を付いて見守るしかないようだ。

「その話ですが、後回しにしてもらえませんか？」

稲葉は、少したくらんだような顔をしてはいるが、それを見せない

ようにして言った。

それに対して、すぐにでも答えがほしい王様は、戸惑いが隠せないようだ。

「どうしたのだ？何かあったのか？そうなのか？」

「父上、少し落ち着いてください…。」

まるで、何かに絶望したような声で稲葉に質問をぶつける王を見かねてか、王女が、昨日ほどの勢いではないが、止めに入った。

「すみません、どうしても決着をつけないといけない事があります。」

そう言った後に、稲葉は王妃の方へ向く。

「王妃様、あの日、あなたはどこにいらっやいましたか？」

No.16 答え

「王妃様、あの日、あなたはどこにいらっしやいましたか？」

稲葉がそう言った瞬間、謁見の会場は、ざわめきでいっぱいになった。

臣下の人たちは、口々に何かを言っている。
ただ一人だけを除いて…。

「ちなみに、あなたは、ここには居なかった。そうですね。」

更に、稲葉は問い詰めを続ける。

すると、王妃はその問いだけに答えた。

「そうね…、確かにいなかったわ。」

これは誰もが知っている事実である。

「ではあの日、あなたはどこにいらっしやいましたか？」

稲葉の究極の質問。

王妃は、少しうつろたえた。

それを見た臣下は、稲葉にこう言い放つ。

「貴様、王妃様に向かって、何という口のきき方だ!!」

「やめなさい。いいですよ。」

「しかし…」

王妃は、その臣下をなだめる。

その臣下は、素直に後ろに下がった。

「確かに、あの日私はこの城にはいなかったわ。しかし、行先まで知ってどうすると言いますの？」

王妃は、稲葉に対する答えは変えることなく言った。

「少し貴方のお顔に見覚えがありましたね…。」

「見覚え？」

王妃は、何も知らないような顔をしている。

それを見ている稲葉は、更に問い詰めてみる。

「あなたは、あの日『城下町で一泊した』と書かれてありました。」

稲葉は、どこぞの探偵のような雰囲気醸し出したまま、その記事を取りだした。

「確かに…、それも真実よ。」

王妃もまだ尻尾を現さない。

だんだんと、二人は一問一答のような形になっていった。

「更にあなたは、繁華街の多い『西地区』ではなく、わざわざ『東地区』の方に向かったとも…。」

稲葉は、なかなか尻尾を出さない王妃にじれながらも、質問をぶつける。

「確かに東の方に行ったけど、別に理由はないわ。」

王妃は、稲葉からの鋭い攻撃をひらひらとかわしていく。それをみた稲葉は、早急に『追い込み』にかかった。

「では、こちらの新聞、こちらの真意とは…？」

出してきたのは、昨日見た新聞の中でも、特に稲葉が驚いていた記事の一つ『王妃の残した置き手紙』についての新聞だ。

「！！…そ、それは。」

その新聞記事の内容をみた王妃は、あからさまに動揺をし始めた。そこに再び、稲葉の発言。

「更に、あなたはそれを書いた直後に、城下に向かった。ちがいますか？」

すっかり出来上がってしまった稲葉は、もはや誰にも止められない。

「……。」

ついに黙ってしまった。

そこに稲葉が、最後のオトシにかかる。

「そして、決定的な証拠。こちらをご覧ください。」

二言目は、主に会場に向けられての言葉。

稲葉が取りだしたのは、何の変哲もないフオーク。

しかし、それを取りだした瞬間、会場は一気にざわめき 시작했다。その中を、稲葉は大きな声で言う。

「そうです。これは、あなた方のお城から先日なくなったフォークです。」

よく見ると、フォークの上部には、王家の物を示す、刻印が押されていた。

「最初、この刻印がなんなのかは知りませんでした。」

確かに、このフォークを使ったのは、この世界に迷い込んだその日、いくら紋章として、ハロルド帝国旗のデザインだからといってわかったものではない。

「ならば、あなたは どうしてそれが怪しいと思ったの？」

王妃からの質問。

このときの王妃は、半分くらいはバレしていると確信していたのかもしれない。

「それは、このフォークが純銀で出来ているからです。」

そのフォークが純銀製だと、稲葉が断定できたのは、なんとその言葉放った後だった。

実は、最初の頃は正体が分からなかったが、そのフォークが単なる銀製ではないことはすぐに分かっていた。

だが、それがいったい何なのかは、今日の今日まで分からなかったのだ。

実際先ほどの言葉は、当てずっぽうでしかない。

しかし、その言葉に大きく反応したのは、周りの人間たちだったの

だ。

その周りの人たちは口々に、こう言っている。

「確かに、純銀できていたら、王室の物に違いない。」

というような、言葉が飛び交う。

このフォークが、王室の物であるという確信があるために、純銀製であるというのは、間違いないのだ。

「つまり、あなたは、あの日いた方で、間違いありませんね？」

稲葉の最後の質問。

「そうね…、あなたの勝ちよ。」

ついに、王妃は、降参を示した。

「でも、こんな事をして、どういう事なの？」

王妃は、この場を使った行為についての真意を問うた。

「いえ、ただの探偵まがいです。」

稲葉はそう答えたが、そこには、胸のつかえが取れたような顔をしていた。

~~~~~

「えゝ、オホン。」



その咳払いをしたのは、この数十分、完全に忘れ去られていた王であつた。

今まで、激論を繰り広げていた二人も、王の存在を完全に忘れていたらしく、少しの間、沈黙が流れている。

「もう…、よろしいですか？」

「え…？あ、はい！」

王の言葉に素早く反応した稲葉は、反射的に言葉を放つ。

「では、私どもの軍に入っただけですか？」

相変わらずの、単刀直入。

しかし、このときぐらいは許してもよいだろう、と会場にいる誰もが思った。

「はい、謹んでお受けいたします。」

稲葉も、最後はちゃんと、片膝をついて、承諾の意を表明した。

No.16 答え（後書き）

稲葉編、これにて当分終了です。

次回から、日常編をお送りいたします。  
更に、公式戦直接対決もあるかも？

試合が再開した。

みた感じでは、昨日よりも、田中が押している場面が多く見られるようになった。

更に、先程は、ビデオ判定ではダメだったが、田中が一本入れるようなシーンもあった。

『明日にはこえられてるんじゃないか？』

サフランが、そんな危惧を思わせるのも無理はない。

ビデオ判定で一本入らなかった後も、田中は積極的に、サフランを攻め立てる。

また、サフランの隙をついた攻撃にも、少しずつではあるが、対応し始めている。

「なかなか、やるようになったんじゃないの？」

20連以上にも及ぶ、長い連携技をやり終わったサフランは、珍しく少し肩で息をしながら言う。

その話相手である田中は、このサフランのコンボを全て見切った。更に、後ろに下がるときは、反則にならないように、左右に下がったりもするほど、余裕も出始めている。

「やあああああ！！！！」

今度は、田中の反撃の番。

大きな威勢のある声で、サフランに向かっていく。

「パン、パン、パパン!!」

田中も、10連くらいの連携技を繰り出す。

更に、その一発一発が重いらしく、サフランも少し涼しい顔が崩れ始めている。

しかし、それでも田中は、サフランから一本を取ることが出来なかった。

『ピーッ!』

突然ブザーが鳴った。

何故かと言えば、試合開始から半ラジアン（40分）経ったからだ。いくら、時間無制限の勝負であっても、40分続けてやるとするのは、体の問題に関わる。

よって、半ラジアン試合を続けた場合、原則として、10分以上の休憩を取らなければならないことになっている。

「ふう…。」

ここまで、40分間ずっと精神を集中していたといってもおかしくない田中は、軽く息を吐いて、緊張状態を解く。

「はあ。」

一方サフランも、ここまでの長い試合は初めてらしく、『緊張を解く』というよりは、『本格的に疲れを癒やす』感じに、息を吐いた。

『何回か見たことあるけど、こんなに辛いんだな…。』

物理的に考えても、フルタイムの試合には、なかなかお目にかかれ  
ない。

それこそ、一生に一度経験するかしないか。

ちなみに、しないという人は、『一度はしてみたい』と思うらしい  
が、経験した人は、『二度と御免だ!』と思う人も少なくないら  
しい。

ほかに、水分補給や、ストレッチなどを行っている、10分は  
あつという間に過ぎていった。

しかし、二人ともその時間に試合を再開できる状態ではないらしく、  
その後もグダグダと休んでいる。

まあ、『10分以上』だというのは、別に10分休んだだけで  
始めなくてもよいのだ。

『さて、そろそろやるか。』

結局20分位した後で、試合を再開することにした。

実をいえば、どちらとも疲れが回復したとは言い難い。

だが、疲れを全快して、体が冷えてしまつては、もつたないとい  
うことで、『さつさと、片を付ける。』ような心意気である。

『一本目・再試合』

モニターには、そう映し出され、その数秒後には、試合開始を告げ  
るブザーが鳴った。

「うおおおお!」

先に仕掛けてきたのは、サフランだ。

この試合のサフランは、今までと少し違っていた。

少し、攻撃が性急になっているところだ。  
サフランは、体力面でいっても、まだまだ伸び盛りな年。  
更に、その体力は、平均を超えるほどだ。

しかし、そのサフランでも、40分連続はきつかった。  
サフランの考えでは、何としても、一本を取ってしまいたい。  
そういった気持ちもどこかにあったのかもしれない。  
サフランは、この試合を振り返ったとき、

『あの時は、どうかしていたのかもしれない。』

そう言うように、自分でもあまり見たことの無いような試合内容だったらしい。

確かに、一本取られてはいないながらも、攻撃を許した、というのは、精神的な動揺につながったのかもしれない。  
その動揺と、疲労がサフランをオカシクさせたのかもしれない。  
それだけ、守りがおろそかになるほどに。

逆に、田中の方は、サフランよりはダメージが少なかったらしい。  
ちなみに、休んでいた時間も、後半は、相手の研究につとめていた。  
田中は、試合を振り返った中で、

『確かに、疲れはあったが、そこに内容が伴っていた。』

この発言からも、二人のダメージの違いが見えてくる。  
相手の隙を明確に確認できるほどに。

『スパアアアンー!!』

部屋の中に大きな音が響きわたった。

『ピーッ!』

それとともにブザー音になる。

そのプレイは一瞬の出来事だった。

そしてランプは、何と、田中の方に点いた。

判定は、面うち。

両者とも、『有り得ない』というような顔をしている。

この際、二人のあり得ないについての用法が違ふことは、おわかりいただけると思うので、省略させていただく。

そして、モニターでは、リプレイが流れ始めた。

サフランの怒濤のラッシュの中、疲労であろう反動か、ごくわずかな時間だけ、間が空いた。

ちなみに、前述していたように、攻めに徹してしまい、守りがおろそかになっていたサフラン。

そこに田中がつけ込んだ。

その一瞬の間を見逃さず、綺麗な面うち。

今度は、文句なしの一本勝ちである。

『勝者・田中』

モニターに、初めて田中の文字が踊った。

更に、その冠詞が『勝者』であるから、喜びもひとしお。

なお、ガッツポーズなどをしながら、喜ぶ田中を端から見て、敗北

をかみしめているサフランは、

『もうそろそろかな？』

そう思ったサフランの脳内には、まだ『余裕』の二文字が踊っていた。



『勝者・田中』

稽古二日目の結果は、一日目とは、正反対という言葉では、言い表せないことであつた。

初めてサフランに勝つた田中は、下宿舎への帰り道の間も、舞い上がりは変わることにはなかつた。

それどころか、その感情は、時間を追うごとに大きくなっていつている。

『あのサフランから、一本を取つた。』

その事實は、昨日の出来事が記憶に新しい田中にとっては、非常に大きなものだったのかもしれない。

あつという間に、下宿舎に着いた。

時間は、まだ午後3ラジアンを過ぎたばかり。

しかし、その時間帯に、下宿仲間の三人は、もう帰ってきていた。そして田中は、この時初めて三人の名前を知ることになる。

「おうーす、ただいま。」

まずはじめに、意気揚々とした声で中に入っていく。

「「「おかえりなさい。」」」

三人は声をそろえて、そう告げる。

三人は、どうやら宿題をしているようだ。

更に、言語が日本語と、田中には理解できる言語だったので、何の勉強をしているのかは、はっきり分かる。

ここで、田中のスポーツだけじゃない脳が発揮される。

「へえ、数学の宿題か…。お、懐かしいな。」

田中は、ずいずいと三人のやってる宿題をみた。

「うわ、近代化過ぎだろ…。」

そこには、現在のタブレット型PCを操っている姿が。

「え？これが普通だぞ？」

確かに、地球でもこんなのが出回り、学校でも使われ始めているところもあるが、『普通』というとなると、少々違う感じもする。

「ほら、早くしないと、締切来ちゃうよ？」

この世界では、宿題はネットで提出している。

それによつて、出していない人が分かたりするために、これに関しては、政府も関わっている。

「いや、わかんねえんだもん…。」

さて、宿題の内容に戻るわけだが…。

「なんだ？数列か？」

いくらスポーツバカといえども、高三は高三、高二での勉強範囲は、お手の物である。

「俺が教えてやるよ。」

「本当か？」

田中がそう告げると、三人は、目を輝かせたように、田中の元に群がってくる。

『結局、全員わかんねえのかよ……。』

そう思ったが、それを口にすることはなかった。

「ここは、こうやってだな……。」

「なるほど……。」

そんな四人の風景を、夕食の準備をしながら見ていたサフランは、

「だんだん慣れてきはじめたな。」

四人には聞こえないくらいに、小さな声で言い、再び準備に戻った。すると、数分もしないうちに。

「お前、ふざけんなよ!？」

先ほどの場所から聞こえる怒号。

『もしかして、田中か?』

恐れていた事が起きたみたいな感じで、サフランは様子を見に向か

う。

しかし、当の田中は、ケンカをしている、というよりはむしろ、困っているような感じだ。

そのわけは、

「次は、俺が教えてもらうんだよ！」

「なに言ってるんだよ！次は俺だ。」

「いや、まだ終わってないから。」

三人が田中を巡っての喧嘩だった。

その間に挟まれた田中は、喧嘩を止めようとするが、どこから止めて良いか分からず、オロオロしている。

この事態に、サフランは頭を抱える訳で。

「何やってんだ…お前ら。」

もはや、ツツコむ気力さえ、奪われていった。

~~~~~

なんとか喧嘩は収まり、田中が勉強を教えていると、あっという間に、夕食の時間になった。

「ええ〜つと、『トム』と、『スギ』と、…『チビ』？」

田中が勉強を教えている間に、みんなから、名前を覚えてもらった。若干一名、納得しない名前があるようだが。

「ちょ…、『チビ』は勘弁してくださいよ。」

「良いじゃないか。チビなんだし。」

「そうですね…。」

チビという名前に異議を唱えたが、スギにつまく言いくるめられた。
こうやって、三人と一人の友好は、今後も続いていく。

くくく

「さて…。」

サフランがいきなり立ち上がった。

「今日は何日だ？」

「8月31日です！」

トムが手を挙げて、そう答える。

「そう、ということは、明日は9月1日だ。」

「更に明日は、土曜日です。」

サフランが言った後に続いて、チビがこちらも手を挙げて告げる。

「ならばやることは…。」

「くくくひとくつ…！」くくく

サフランのための後、四人は、一斉にかけ声を出した。
ただ一人、全く状況を把握できていない田中を除いて。

「え？ちょ、何があるって言っんですか？」

全く意味の分からない田中は、まだ円陣を組んだままの四人に、助けを求める。

「ああ、言ってなかったな。」

「明日は、衣替えの日なんだ。」

「しかも、こここの寮なら、全員参加でなくてはならない。」

「そうそう。」

前半の三人だけで話が終わってしまい、何の補足情報も言えなかったスギを除いた三人の説明によって、ようやく先ほどの謎の円陣の意味が分かった田中。

「ほら、お前も。」

サフランが田中を手招きする。

田中は、四人の元へ行って、円陣に加わる。

「よし、じゃあもう一回。」

サフランがそういうと、みんなはサフランを見る。

「やるぞー!!」

サフランが大きな声で叫ぶ。

「」「」「おー!!」「」「」

それを聞いたほかの四人は、一斉に叫んだ。
そのまま、この夜は更けていった。

No.19 サランダの服事情

時は、新暦526年9月1日。

サランダ帝国では、衣替えの季節になった。

だいたいの家庭は、このちょうど初日の日に、全ての準備をすませている。

そして、それはここでも…。

「おはようございま〜す。」

まだ、朝の5ラジアン過ぎだというのに、目覚めすっきりに起きてきた田中。

しかし、それでも、起きてきた順番は、最後だった。

更に、「遅い」とまで言われる始末。

田中は、この国の寝起き事情には、まだついて行けてない。

『昨日は、「てっぺん」越えてなかったっけ?』

てっぺん、つまり日付が変わるまで、五人でワイワイしあつた中、朝、この時間帯にすでに起きているというのは、いかほどの睡眠時間なのかは、容易に想像は出来る。

しかし、少なくともそんな生活は自分は出来ない、と田中は静かに思うのである。

何はともあれ、田中は席について、みんなとは少し遅い朝食を取る。その間に四人は、自分の区域を確認している。

サランダ帝国では、日本でいう大晦日近くになると、大掃除と称して、家の中を綺麗にする、ということとはしていない。

だが、その代わりに、こういった衣替えの時に、大掃除のようなこ

とをするのが、一般的だ。

つまり、衣替えは、春と秋の年二回。

よって、大掃除よりも、間隔が短いということになる。

「御馳走様。」

今日の朝食は、パワーを付けるために、肉系が多かったが、別にしつこくなく食べられた。

これが、料理のうまい人が作る飯である。

「じゃあ、早速やり始めるか。」

食器を洗い終えた田中が、リビングに戻ってくると、サフランが開始の合図をする。

田中は、朝食を食べながら、自分の区域を聞いていたので、どこをやるかは、だいたい分かっている。

しかし、田中は向こうから見れば、異世界の人。

つまり、田中から見れば、異世界の場所。

こっちに来てから、驚かせられっ放しの田中にとっては、『今度は何に驚かせられるんだ?』と、少し恐怖もあった。

~~~~~

遂に、サランダ帝国の恒例行事である『衣替え』が始まった。

最初は、日本の『衣替え』と同義である、服の入れ替えが始まる。

サランダでは、不思議なことに、あまり夏服と冬服で大きな差は見られない。

衣服の技術の進歩による結果だろうか、夏服には、風が通りやすいような加工を、冬服には、熱を逃がしにくくする加工を施している。まるで、ユークロのようだ。



しかし、それだけではなく、少しかり気候も関係しているらしい。ここサランダは、高層ビル群が立ち並ぶといっても、何も考えずにバンバン建てているわけではない。

ちゃんと、近代都市らしく、風の通りなどを計算して建てているらしい。

更に、それは国が厳しく管理しているらしく、計算と合わないところに建てようものなら、どれだけ重要な建物であっても、建ててはならない。

そんな理由があつてか、夏用と冬用で、あまり差がないのだ。

「ええーっと、こつちが夏用で、…これが冬用」

ちなみに、上記と同じような理由で、春用・秋用といったものは、一切ない。

現在田中は、ズボン類を夏と冬に仕分け中。

勿論、仕分けしているのは、初日にみんなからプレゼントされた物である。

前述したように、夏用と冬用の服の違いは、外見からは、見抜くことは出来ない。

ならば、田中はどうやって分けているのか…。

答えは簡単。

「これは、『太陽』だから、夏服。『月』は、冬服。」

そう、サランダの服は、外見では見分けがつかないために、服の柄の一部、または、タグに『太陽』『月』のマークがつけられている。どっちがどつちかというと、先ほど田中の言ったとおり、太陽が夏

服、月が冬服。

こうやって、昔からサランダの人は、分けていたらしい。

~~~~~

さて、服の仕分け作業も終わり、これから大掃除に入る。

ほかの四人は、早くも掃除に取りかかっていたり、衣替えの終盤と言ったり、それぞれ速さはマチマチである。

田中の持ち場所は、やはり初めてという事なのだろうか、少しだけみんなと少ない。

田中自身は、あまりそれを望んでおらず、むしろ『みんなと同量の仕事をこなしたい。』と言ったらしいが、あえなく却下された。

しかし、その代わりといっては何だが、重要な仕事を任せてもらった。

それは、水回りである。

ほかの四人曰く、

「あそこをクリアしたら、後は大丈夫。」

らしい。

ちなみに、田中も使っているが、相当気合いを入れて掃除をしなければならぬというのは、分かっていた。

しかし、その前に任されていたのは、自分が使っている部屋だ。

現在田中は、下宿舎での、それぞれの個室で、ちょうど一つだけ空いていたという、部屋を使用している。

部屋を使って、三日・四日だろうが使用者は使用者。

しっかり、掃除をしなければならない。

部屋には、ほとんど何もない。

あるとすれば、最初からついていた机、椅子、筆筒くらいである。勿論、田中は地球から『使えない時計』以外のものは持ってきてないし、ここで何かを自分で買う、と言うようなこともない。

つまり、田中の場合、部屋の片づけというよりは、使っていないかったときに溜まったであろう、埃取りといったところだ。

田中は、あまり時間をかけずに、部屋の掃除を終わらせ、最強を誇る、らしい水回りへ行く。

しかし、そこで『田中 vs 水回り』の仁義無き戦いが繰り広げられるようとは、このとき田中は、頭の端にも、置いていなかった。

今日は、9月1日。

サランダ帝国では、年二回行われる、衣替えを迎えていた。

現在の進捗度は、田中が、最強と謳われる水回りに挑むところだ。

~~~~~

「これはひどいな…。」

そこには、共同の洗濯機や、洗面所などが、毎日使っているのだが、改めて見ると、色々と汚いままであった。

今までは、皆辛うじてクリアしてきたらしいのだが、半年もすれば、ひどい有様である。

とはいえ、自分でやると決めたこと。

いつまでも呆然とするわけにはいかない。

「よし、やるか。」

田中は、ついに決心した。

未だ、どこからどう手をつけて良いのか分からないまま、始まった挑戦とも言える掃除は、早くも田中に牙をむく。

「最早…、どうしたらいいんだ？」

水回りとして任せられているのは、洗面所一帯の部屋で、お風呂は含まれていないのだが、それでも所々に、いろいろこびりついたりする。

田中は、この膨大な仕事に為す術が見つからない。

しかし、そのときふと、

『無闇にしようとしなくて、どこからやるうとか、順番を決めると良い。』

スギのアドバイスが思い浮かんだ。

一番頑張りやさんのスギは、昔から率先して、ここを任せてもらっていたらしい。

その一番の経験者のアドバイスは、後々に強い味方になる。

「よし、やるか。」

二度目の声。

そして今度こそ、田中は作業を開始した。

田中は、いろいろと物が少ない南の方角から、始めていく。

しかし、南の方は物が少ないながらも、お風呂に近いということもあって、床や壁などに、水滴から出来たのだらう、水垢がポツポツとある。

それだけならまだ良いのだが、厄介なのは、天井にも付いていることだ。

天井なら、手に持っている雑巾でも届かないし、ましてや、お掃除ロボットなどでの外だ。

更に、天井の色が黒いために、よけいに目立ったりする。

「どうしようかな…。」

いきなりの大きなクエスチョン。

ひとまず田中は、床や壁に付いた物を先に除去してから、じっくりと考えることにした。

しかし、良い考えが浮かばない。

その時、洗面所から廊下につながる扉が開いた。

「お、ちゃんとやってるじゃん。」

それは、ここの区域を何度も担当したことがあるスギだった。

現在の田中は、壁と床の水垢を落としたところ。

言うなれば、これから、天井のそれをどうやって落とそうかと考えあぐねているところだ。

「あれ、どうしたらいいんだ？」

こっちに向かってきたスギに向かって、田中は質問する。

もちろんあれとは、天井の水垢のことである。

「あゝあれは、どうにもならないな……。確かここに……。」

そうやって、色々とゴソゴソしながらスギが出してきた物は、四本の棒だ。

更にその一方は、一つの場所にまとめられ、もう一方は、丁度正方形の頂点の場所に来るような物だ。

しかし、こんな物をいつたいどのように使うのだろうか…。

「こうやって、それ！」

何と、スギは開いている側の先に雑巾を広げ、逆の先端を持って持ち上げてしまった。

「こうやれば拭ける。」

そして、先端が天井に付いた途端に、棒を天井にすり付けるような形で、前後に振った。  
すると、綺麗に水垢が取れてしまった。

「へえ、すごいな。」

田中は感心するように、その一部始終を眺める。

「ほら、お前も使ってみるよ。」

スギは、半分くらいの水垢を取ってしまった時に、田中にその棒を渡した。

「……、おお、サクサク取れる。」

田中も実際に使ってみるが、思ったより簡単に取れる。

「おう、頑張れな。」

そう言うと、まだ仕事が残っているらしく、すぐに自分の持ち場に戻っていった。

スギが戻っていった数分後には、天井にこびりついた水垢は、すべて取れてしまった。

「あんなに、いっぱい付いていたのに……。」

取る前と取った後では、天井の色が違うのではないか、という位である。

更に、全体的な印象からしても、部屋が少し明るくなった感じがす

る。

「じゃあ次は…。」

田中が見回していると、ある一点だけ妙に汚れが目立つところがあった。

「ん…、…やるか。」

田中は少々思案したが、観念したというように、そこに向かっていった。

そこというのは、具体的には、洗濯機の周りである。

だが、やはり『男の洗濯』の為なのだろうか、洗剤を置いた辺りは、零れた洗剤などで、ベトベトになっていた。

「こ…これは。」

実は、みんなのために、個人の洗剤入れがある。

これは、自分の好みなどもあるかもしれないのだが、やはり服との相性などもある。

ちなみに、サランダの人々は、服を買う際には、同時にその服にあった洗剤も買うらしい。

その背景には、洗剤が服の材質によって大きく左右されるということもあるらしい。

効果を求めすぎた現代人が、その材質専用の物を作ってしまったとの意見もある。

まあ、そんな感じで、洗剤が大量にある。

田中は、まだここに住み始めて数日しか経っていないので、そんな



に汚くはないのだが、ほかの四人の有様がひどかった。

「え？これどうなってんの？」

このような発言が出てしまうほどに。

「え？これどうなってんの？」

田中はそう発さずにはいられないほどの驚愕の事態が起こっていた。

「ちょっと…、これは…。」

田中も言葉が出ない。

その田中の目の前に、広がっていた光景はあまりにも収拾がつかない事態になっていた。

「くっ、取れない…。」

取れないのは、洗剤の容器である。

何故ならば、零れた得体の知れない液体が、その容器の下で、固まっ

てしまっている。  
更に、何と何が混ざったのかは、定かではないが、強力な粘りを生んでしまい、容器たちが全く洗剤入れから離れようとしてくれない。また、その容器たちをよく観察してみると、どれもこれも『混ぜるな、危険。』系統の記述、もしくは、それよりもヤバい表現が使われている。

有毒ガスが出ていない事に、感心していたが、それ以上に、その凶悪なフュージョンにも負けなかった、洗剤入れに、感心していた田中。

再び大きな課題にぶち当たったというのは、言うまでもないところである。

「さて…これをどうするか…。」

ひとまず、やらなければならないことを整理するとしたら、

- ・洗剤入れと、洗剤の容器を適切に切り離すこと。
- ・丁寧に洗い、得体の知れない混合物を処理する。
- ・得体の知れない混合物が触れた場所をチェックする。

この三つの手順が最重要課題となるだろう。

しかし、田中は、その一つ目から一苦労である。

『ガツガツガ。』

既に、適切に分離する時点で、違うような音を出している。

その混合物は、本当に強いらしく、限界まで引つ張ってから、少し鋭利なもので、接着面を切り離している。

幸い、何も『荒れ』などが見当たらないことから、そんなに危険な組み合わせでもなかったらしい。

しかし、これは後から聞いた話なのだが、もう一つ、違う薬品が混ざると、『荒れ』とかいう問題ではすまなかったらしい。

どうやら、命拾いをしたようだ。

しかし、どうにもこうにも効率が悪い。

確かに、薬品の混合という問題上、無闇に何かを使うというのは、少し出来ない。

だが、如何せん強固な粘りがある中、それを一人で、しかも鑿々のみで剥がそうだななんてことは、少し無理がある。

「あゝ、しんどい……。」

半分を過ぎた辺りから、田中の顔に疲れが出始めてきた。

田中が言うには、一人ごとに段々と、粘りが更に強くなっている。そのためか、疲労度が増した体では、剥がすどころか、傷さえ入り辛いようになってしまった。

…と、その時である。

「オッス、さつきから苦戦しているみたいだな？」

扉の向こうから現れたのは、トリオの中で、一番力持ちのトム。だが、トムの口振りを見てみると、いかにも先程から様子を伺っていたような感じがした。

「お前…、見てたのか？」

田中が気になった感じで、聞いてみた。すると、トムは焦ったような感じで、

「え？いや、そ…んな事は、ない…かな？」

答えが曖昧である。

そして、田中の鋭い質問をしたときに、扉から少し大きな音がしたのは、田中は気付かなかった。

「そ、そんな事より、手伝うからさ、早く取っちまおうぜ。」

トムは急いで話を進める。

「ん？ああ、そうだな。」

別に、田中は気にしないで、次に進めることにした。

「これか？」

トムは、現在の進捗度を見てみる。

トムは、例の粘りを引っ張ってみるが、一番力持ちのトムでさえも、剥がれそうにはない。

すると、その光景を見ていた田中は、こんな提案を試みた。

「なあ、そのまま引っ張っていてくれない？」

つまり田中は、トムが持ち上げたところに、田中が鑿で取る、という連携である。

「どうか？」

早速、トムはそれを持ち上げてみる。

すると、剥がれはしないのだが、少し鑿を入れられそうな位の場所が出来た。

トムによれば、かなりの反発力があるのだが、そこは一番の力持ち、しっかりと持ち上げた位置をキープしている。

「よし、ナイス。」

その光景を見た田中は、そういつて、その場所に鑿を入れ始めた。

『ガッガッガ。』

同じような鑿の入れ方をしても、はかどりようは一目瞭然だった。

『ガッガッガッ、ベリッ！』

今までの約半分から三分の一の時間で、一つの容器の救出に成功した。

そのまま全部取っていくと、あっという間に全ての容器を救出することができた。

しかし、これだけでは、終わらない。

「じゃ、これを洗うのも手伝ってもらおうかな？」

田中は、とことんき使うつもりらしい。

ついでに、容器の洗浄の手伝いも申し込んだ。

「別に構わないけど。」

トムは、一つ返事でOKした。

「じゃあ、俺はこの入れ物でも洗おうかな。」

田中は、やけに声を張って、主張する。

しかし、田中の足は、その入れ物とは、まったく別の方向に進んでいた。

No.21 死闘…?? (後書き)

〔緊急ニュース〕

この小説の累計PV数が、10,000PVを超えました。  
(やった〜！)

これに伴い、現在行っている日常編の後にある、全国大会予選編で、一日二話UPという無謀な挑戦をしてみたいと思います。

日程、時間帯など詳しいことは、追々「後書き」で、記させていただきます。

みなさん、どうもありがとうございました。  
また、今後とも、よろしくお願いいたします。

著者・谷口エイジ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9761t/>

---

異世界ファイター

2011年10月10日10時08分発行